

詳ナラサルハ該費用ハ地方税ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ属スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルヲ能ハサルハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルハ之ヲ本籍ヘ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ケ年間戸長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方税雜收入ニ組入ルヘシ

○北海道轉籍移住者手續明治十六年四月第十號布達

沿革略記 明治二年七月開拓使設置以來同使達ヲ以テ札幌管轄諸郡へ移住農夫三ケ年間扶助セラルハモノ或ハ無産

ノ者へ開墾地割與セラル、等給與ノ法ヲ定ム○七年七月開拓使第二號布達ヲ以テ從來ノ定則ヲ改正シ移住農民給與更正規則ヲ定ム○十五年五月第十號布達ヲ以テ北海道移住者渡航手續ヲ定ム○同年七月第十五號布達ヲ以テ前令第一條中ノ願書ハ農商務卿へ郵送スルヲ得セシム○十六年四月第十號布達ヲ以テ七年開拓使第二號布達中第一第二第三條及ヒ十五年第十號同第十五號布達ヲ廢止シ更ニ北海道轉籍移住者手續ヲ定ム是レ現行法ナリ

北海道へ轉籍移住者手續別紙ノ通相定メ本年七月一日ヨリ施行ス

但明治十五年五月第十號同七月第十號布達及同七年七月舊開拓使第一第二第三條ハ本文施行ノ日ヨリ廢止ス

(別紙)

北海道轉籍移住者手續

第一條 北海道へ轉籍移住スル者ニシテ資力ナキモノニ限り此手續ニ依テ保護スルモノトス

第二條 渡航ノ保護ヲ出願スルモノハ其願書ニ移住スヘキ國郡名村名ノ詳カナルモノハ之ヲ記入スヘシ並產業ヲ營メントスルノ目的ヲ詳記シ猶左ノ各

項ヲ附屬書トナシ原籍戸長及ヒ郡區長ヲ經由シテ管轄廳へ出願ス
ヘシ

一 戸籍寫

二 從來ノ營業及家産ノ程度

三 荷物ノ噸數

但携帶スヘキ農具及各品類ノ大概ヲモ記載スヘシ

第三條 郡區長ハ轉籍移住出願者へ移民心得ノ旨趣ヲ懇篤ニ示諭シ
尙ホ願書ノ事情目的ノ當否ヲ審査シ意見ヲ具シテ之ヲ府知事若ク
ハ縣令ニ開申スヘシ府知事縣令ハ之ヲ事實適當ノモノト認ルトキ
ハ其旨ヲ副書シ農商務省へ進達スヘシ

第四條 渡航ノ保護ハ左ノ制限ニ依ル

一 三菱會社共同運輸會社運漕社ノ船舶開帆ノ港ヨリ乗船ヲ許可
スヘシ但到着スヘキ港ハ函館、江刺、壽都、小樽、室蘭、浦河、幌泉、
大津、岩内、増毛、宗谷、根室、厚岸、釧路、濱中、網走、擇捉^島ノ十七港

灣トス

二 渡航票ハ函館港迄ノモノト移住地最近ノ港灣迄ノモノトノ二
葉ヲ下付スヘシ故ニ其出發港ヨリ移住地最近ノ港灣マテ直航
ノ船便アルトキハ二葉ノ渡航票ヲ併セ乗船切符ト引換乗船ス
ヘシ直航ノ船便ナキトキハ先ツ函館港迄ノ渡航票ヲ乗船切符
ト引換同港ニ着シ函館縣廳へ殘一葉ノ渡航票ヲ持參シ更ニ渡
航ノ儀ヲ出願スヘシ

三 函館着港ノ上船都合ニ依リ陸行セントスルモノハ函館縣廳へ
出願スヘシ但陸行ヲ許可スルトキハ持參スル所ノ渡航票ニ換
ヘテ其運賃ニ當ル金額ヲ支給スヘシ

四 陸行ノ場合ニハ其旨ヲ函館縣ヨリ沿道ノ縣廳及ヒ郡區役所警
察署へ通達スヘシ沿道ノ郡區役所警察署ニテハ宿泊其他注意
ヲ加ヘ時宜ヲ斟酌シ及フ丈ケ保護ヲナスヘシ但別途費用ヲ給
ゼス

五 手荷物ノ外一戸ニ付五十才以内ノ荷物運賃ヲ支給スヘシ

第五條 制限外ノ荷物ハ勿論發着ノ解賃船待滞在中ノ費用ハ總テ自辨スヘシ

第六條 渡航願ノ許可指令並渡航票ハ管轄廳ヲ經テ下付スヘシ又事宜ニ依リ郡區役所ヲ經テ下付スルコトアルヘシ

但郡區役所ヨリ願人ニ下付シタルトキハ渡濟ノ上其郡區長ヨリ府知事縣令ニ其旨ヲ開申スヘシ

第七條 渡航者ハ下付ノ渡航票ヲ以テ三菱會社共同運輸會社運漕社漁船ノ開帆スル各港ノ内便宜ノ場所ニ至リ乗船切符ト引換乗船スヘシ

渡航票ト乗船切符ト引換タル後ハ總テ漁船會社ノ規則ニ從フモノトス若シ引換後乗船時間ヲ過キ乗後レ又ハ事故アリテ乗船ヲ止メタルトキハ右會社定ムル處ノ時間内ニ再ビ乗船切符ト渡航票ト引換ノ手續ヲナスヘシ右切符引換ニツキ該會社ニ對スル償金ハ自辨

スヘキモノトス

渡航中不得止事故アリテ上陸シタルトキハ其事由ヲ詳記シ其地郡區長郡區役所アラサノ公認ヲ請ケ其趣キテ原籍郡區長府知事縣令ヲ經由シ農商務省ヘ届出且其際渡航票面ノ金額ヲ農商務省ヘ辨償スヘシ

但急劇ナル病難ニ罹リ乗船ヲ止メ又ハ乗後レ若クハ航海中上陸スル場合ニ於テモ總テ此手續ヲ爲スヘシ尤モ該地醫師ノ診察書ト郡區戸長ノ公認ニ依テハ費用ノ辨償ハ特別處分スルコトアルヘシ

第八條 渡航者許可ヲ得タル後事故アリテ原籍地若クハ乗船スヘキ港ニ於テ滞留三十日ヲ超ルトキハ其事由ヲ詳記シ其地ノ郡區長郡區役所アラサノ公認書ヲ副ヘ農商務省ヘ届出ツヘシ猶ホ滞留百六十日ヲ過クルトキハ本人ヨリ直ニ渡航票ヲ農商務省ニ返付シ其旨原籍郡區長ヲ經テ管轄廳ヘ届出ツヘシ

第九條 渡航者其乘船スヘキ港へ着シタルトキハ其地ノ郡區役所郡區役所アラサルニ其旨ヲ届出ツヘシ此届出ヲ受ゲタル郡區役所戸長役場ニテハ注意ヲ加ヘ乗船ニ關シ及フ丈ケノ保護ヲ加フヘシ但別途費用ヲ給セス

第十條 函館港ヨリ更ニ渡航ヲナストキハ函館縣廳ニテ渡航者ノ願ヲ審査ノ上許可スルモノトス

第十一條 汽船會社ハ渡航者ヨリ受收スル處ノ渡航票ヲ以テ金額受取方農商務省へ申出ヘシ函館港ヨリ乗船スルモノハ函館縣廳へ申出ヘシ

第十二條 第四條第一項ニ記載スル處ノ港灣ノ内移住地最近ノ港灣ヨリ移住地ニ到ル距離二里以上ニ渉ルモノハ滿三歲以上ノ人員ニ應シ每一里一人ニ付金五錢ノ手當ヲ給與ス但滿三歲未滿ノ幼兒及距離三里未滿ノモノハ給與ノ限ニ在ラス

第十三條 移住地到着ノ上他ノ雇人稼人ノ類ニ非スシテ自ラ營業ヲ

ナス者ハハ一戸ニ付假家作料金拾圓及營業器具代金八圓五拾錢特ニ農業者ヘハ種物代金壹圓五拾錢宛ヲ給與スヘシ

第十四條 保護ヲ受ケ移住シタル者其移住後滿五ケ年以内ニ北海道ヲ去リ他ニ轉籍又ハ寄留スルトキハ既ニ保護支給シタル金額ハ戸主若クハ本人ヨリ之ヲ辨償セシムヘシ

(渡航允許證票略之)

○北海道轉籍移住者渡航手續細節十六年六月農務省第六號達本年四月第十號布達北海道轉籍移住者渡航手續細節左ノ通可相心得此旨相達候事

- 一 渡航ノ保護ヲ出願スル者ハ別紙願書書式ニ依ルヘシ
- 二 荷物運送官費支給ノ制限外ニ渉ルノ場合ト雖モ強テ荷造ノ區別ヲ要セス但其制限外ニ渉ル分ノ運賃ハ其乘込タル船ニ自費直拂セシムヘシ(參考一尺立方ヲ一才ト稱シ百才ヲ以テ一噸ニ比例ス)十七年農務省第十一號達
- 三 渡航者ノ乘込タル船横濱ニテ若滯船日ヲ重テ三菱會社共同運輸會社運漕社船ノ中ニテ繼替乘船スヘキノ便利アル

場合ニ於テハ當該乘組船長又ハ取締役ノ加印ヲ以テ繼替乗船ノ義ヲ本省へ願出ルルキハ之ヲ認可シ更ニ乗船票ヲ下附スヘシ

四 移住地最近ノ港灣ヨリ移住地ニ到ル距離三里以上ニ涉ルモノ、手當金ハ移住地ノ管轄廳ニ於テ其里程相當ノ金額ヲ給與スヘシ

五 年度内經費ノ都合ニ依リ翌年度迄渡航保護願ヲ差止ルアルキハ官報及東京日々新聞報知新聞上ニ於テ其旨五日間廣告スヘシ

(書式畧之)

○北海道移住農民給與更正規則 七年七月二號布達 當使管内移住農民給與ノ義從來ノ定則ヲ更正シ本年八月一日ヨリ別記規則ノ通施行候條此旨布達候事

(別記)

移住農民給與更正規則

第一條 (十六年第十號布達) 以テ廢止

第二條 同前

第三條 同前

第四條 若籍ヨリ舉家一手ヲ以テ三ヶ年間開墾シタル土地ハ地價上納ニ及ハサル事

但毎歲檢地ノ土地券相渡シ私有地トシ其年ヨリ七年間除租ノ事

○褒章條例明治十四年十二月六十三號布告

沿革略記

明治二年七月達府縣奉職規則中ニ忠孝節義篤行者賞與取扱ヲ定メ其輕賞ハ府縣ニ委任シ重賞ハ稟裁ヲ經テ施行セシム○三年十一月達ヲ以テ前ニ令スル所ノ賞與金數ノ多寡及其取扱ヲ定ム○同年十二月辨官達ヲ以テ尙ホ賞與ノ緩急ヲ計リ其取扱方ヲ示ス○五年正月第拾二號達ヲ以テ三年十一月及十二月辨官達ヲ廢シ褒賞ハ事ノ細大ヲ論セズ稟裁ヲ經テ施行セシムト雖モ賞與ノ時機ヲ失フノ慮アルモノハ輕賞ニ限リ時機ノ處置ヲ示ス○八年七月第百二十一號達ヲ以テ篤行及ヒ奇特者賞與條例及ヒ學校病院其他道路橋梁及濟貧恤窮等ノ費用ヲ出スモノ、賞與規則ヲ定ム○十四年十二月第六十三號布告ヲ以テ褒章條例ヲ制定ス是レ現行法ナリ

褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別紙)

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行卓絶ナル者孝子順孫節婦義僕ノ類又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者疏河築隄修路墾田ノ業或ハ貧院學校設立ノ類ヲ云フヲ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フコトアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ

以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス

(褒章ノ圖及佩用式略ス)

○褒章ト金銀木盃金圓賜リ方明治十六年一月第一號布告

明治十四年十二月第六拾三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄付シタル者ハ金銀木杯若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

○褒章條例取扱手續第十四年十二月第六拾三號布告

今般第六拾三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定候條此旨相違候事

但明治八年七月第百貳拾壹號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候事

第一條 凡シ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ褒章ヲ賜フノ限リニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒章ヲ賜フヘキモノト思量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其申牒ニ據リ勅委任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ

但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レモ勅委任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

第九類

○鳥獸獵規則 明治十年一月拾一號布告

沿革畧記

明治元年四月及九月達ヲ以テ獵リニ發砲鳥打等ヲテ農事ヲ妨クル者ノ取締ヲ爲ス○二年四月達ヲ以テ發砲ノ禁ヲ犯ス者ハ其器具ヲ沒収ス○三年五月達ヲ以テ諸邸宅中ニ於テ發砲ヲ禁ス○五年正月第二十八號布告銃砲取締規則第六則ヲ以テ銃獵ノ取締ヲ爲ス○六年一月第二十五號布告ヲ以テ鳥獸獵免許規則ヲ制定ス○同年三月第百拾號布告ヲ以テ前令ヲ改正シ更ニ鳥獸獵規則トナス○七年十一月第百二十二號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十年十一月第十一號布告ヲ以テ尙ホ之ヲ改正ス是レ現行法ナリ

鳥獸獵規則別紙ノ通改正候條此旨布告候事

(別紙)

鳥獸獵規則

第一條 小銃ヲ用テ鳥獸ヲ獵シ生業トスル者ヲ職獵トシ遊樂ノタメニスルヲ遊獵トス

第二條 銃獵免狀ヲキ者ハ總テ銃獵スルヲ禁ス但有害ノ鳥獸ヲ除ク
カダメニハ地方官ノ便宜ヲ以テ臨時ノ免許ヲ與フヘシ

第三條 銃獵免狀ヲ得ント欲スル者ハ願書ニ族籍職分住所姓名年齢
ヲ詳記シ東京府下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ヘ差出スヘシ
(十四年第六十一號布告ヲ以テ農
商務省トアルヲ警視廳ト改ム)

第四條 免狀ハ其効一期限ニ止ルモノトス免狀ハ貸借シ賣買シ若ク
ハ授受スルコトヲ禁ス

第五條 免狀ヲ願受ル者ハ左ノ通免許稅ヲ納ムヘシ
一 職獵稅 金壹圓
一 遊獵稅 金拾圓

第六條 水火盜難其他ノ事故ニヨリ免狀ヲ毀失スル時ハ速ニ東京府
下ニ於テハ警視廳其他ハ該地方官廳ニ届出ヘシ再ヒ免狀ヲ願受ル
者ハ更ニ稅金ヲ納ムルニ及ハスト雖モ手數料トシテ金貳拾五錢ヲ
納ムヘシ(十四年第六十一號布告ヲ以テ農
商務省トアルヲ警視廳ト改ム)

第七條 左ニ記列シタル者ニハ免狀ヲ付與セザルヘシ
一 拾六歳未満ノ者
一 白痴瘋癲等ノ者
一 故ナク弓箭銃砲ヲ放ツノ刑ヲ受ケシ者

第八條 左ニ記列シタル場所ニ於テハ銃獵ヲナスヲ禁ス
一 都府市街ハ勿論衆人群集ノ場所
一 銃丸ノ達スヘキ恐レアル人家ニ向ヒタル距離ノ場所
一 禁獵制札ノ場所

但制札ハ獵銃貳挺ヲ交叉シタル圖ノ下ニ銃獵禁制ノ四字ヲ記
シ掲ケ置クヘシ
一 作物植付ケアル田畑内或ハ社寺人家等ノ構内

但該主又ハ管守人ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第九條 獵銃ハ和銃玉目四々八分以下並ニ西洋獵銃ニ限ルヘシ軍銃
ヲ用アルヲ禁ス

但「開拓使」管内ニ限り和銃玉目拾分以下ヲ用フルヲ得ヘシ(十年第十五號布告ヲ以テ但書追加)

第十條 銃獵期限ハ十月十五日ヨリ四月十五日迄ヲ以テ一期トス是時限ノ外ハ銃獵ヲ禁ス

但地方ノ景況ニヨリ已ムヲ得ス此期限ヲ伸縮スル時ハ其理由ヲ農商務省ヘ届出ヘシ(十四年第四十三號布告ヲ以テ内務省トアルヲ農商務省ト改ム)

第十一條 日没ヨリ日出迄ノ時間ハ銃獵ヲ禁ス

第十二條 凡ソ出獵スル者ハ必ス其免狀ヲ携帯スヘシ出獵中警察官吏區戸長村役人等免狀ヲ看ント請フ者アル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ

第十三條 地主其所有地内ニ於テ他人ノ銃獵スルヲ有害トスル時ハ第八條所示ノ如キ制札ヲ建テ其周圍ニ繩張又ハ假圍ヲナスヘシ

第十四條 凡テ一期内再犯以上ノ者ハ其罰金ヲ倍科スヘシ

第十五條 銃獵ヲ生業トスル者ニアラスシテ職獵ノ免狀ヲ受ケ遊獵スル者ハ五拾圓ノ罰金ヲ科シ免狀取上ル其期內銃獵ヲ禁スヘシ

第十六條 總テ犯則ノ者ヲ他ヨリ證據ヲ取り訴出ル時ハ犯人罰金ノ半ヲ賞トシテ與フヘシ

第十七條 第十四條第十五條ノ外此諸規則ヲ犯ス者ハ三圓ヨリ少ナカラズ貳拾圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

第十八條 「開拓使」管内ニ入り鹿獵ヲ爲ス者ハ該使施行ノ規則ニ遵フ可シ(十年第八十五號布告ヲ以テ追加)

流獵ノ事務ハ十四年第九拾五號達ニ依リ農商務省管理ニ屬ス

○外國人銃獵免狀取扱條例十一年十月丙第五十三號達
當明治十一年度外國人銃獵免許ノ儀別紙ノ通り免狀並條約及ヒ渡方條例共改正候條此旨相達候事

(別紙) 外國人銃獵免狀取扱條例

第一條 銃獵免狀ハ別紙雛形ノ通り相製シ凡積ヲ以テ當省勸農局ヨリ相渡スヘシ

第二條 免狀下渡ノ節ハ外國人ヲシテ別紙雛形ノ通り條約書ニ記名調印セシメ各地方長官東京ニテハ警視本署長官モ同シク記名調印シテ之ヲ該廳ニ留メ置キ免狀渡方取計フヘシ

第三條 銃獵ハ毎年十月十五日ヨリ翌年四月十五日迄ヲ以テ一期ト定メ滿期ノ節ハ約定面ノ通り免狀收却ノ上殘餘ノ分トモ總テ該廳ニ於テ斷裁致スヘシ

第四條 免狀渡濟ノ上ハ總計表ヲ製シ翌年七月限り當省勸農局ニ差出スヘシ

第五條 免狀不申受銃獵セシ者有之節ハ該獵者ヲ取押ヘ成丈ケ證據取置其始末詳細領事ニ訴出ヘシ

第六條 銃獵免狀ヲ領受セシ者ハ條約規程内ハ自他管内ヲ問ハズ總テ免許ノ効アルモノトス

第七條 免狀付與スル節ハ免狀料トシテ金十圓ヲ收入スヘシ但遺失毀傷等ニ因リ免狀再渡ヲ乞フ時ハ手数料トシテ金貳拾五錢ヲ收入スヘシ(十二年內務省丙第十四號達ヲ以テ但書改正)

(免狀並條約離形略之)

○朝鮮人鳥獸獵免狀取扱方農商務省第十二月號達
本邦在留朝鮮人鳥獸獵免狀ヲ請求スルハ遊獵免狀ヲ下附シ總テ内國人同様處分候儀ト可相心得此旨相達候事

○

十四年第八號布告ヲ以テ開拓使ヲ廢シ三縣ヲ置ク

○北海道鹿獵規則明治十一年六月二十號布達
沿革略記 明治九年十一月開拓使乙第十一號布達ヲ以テ鹿獵規則ヲ改正ス是レ現行法ナリ

明治九年十一月乙第拾壹號布達當「使」管内鹿獵規則別紙ノ通改定候條此旨布達候事

(別紙)

北海道鹿獵規則

鹿ハ北海道物産ノ一ニシテ其利タル尠シトセス然ルニ從來獵法制限ナキニ因テ妄獵濫殺繁殖ノ法ヲ缺クノミナラス自然其種ヲ滅シ其聲價ヲ落シ人民モ亦遂ニ其利ヲ失フニ至ラントス故ニ之ヲ保護シ永ク其利ヲ失ハザラシメンカ爲メ茲ニ規則ヲ設クルト左ノ如シ

第一條 免許鑑札ヲクシテ鹿獵ヲ爲スハ自今之ヲ禁ス

第二條 鹿獵志願ノ者ハ左ノ書式ニ照準シ地方廳札幌本廳及ヒ函館根室兩支廳ヲ云フ以下之ニ依リテ願書差出シ免許鑑札ヲ受ク可シ

北海道鹿獵規則

五百八十七

第三條 鑑札ヲ受ケルニハ職獵ハ二枚ニ付金貳圓五拾錢ツ、遊獵ハ一枚ニ付金五圓ツ、獵稅ヲ納ムヘシ

但舊蝦夷人ノ職獵ハ當分納稅ニ及ハス

第四條 獵者ノ員ハ年々札幌ニ本廳管內職獵五百名遊獵三十名函館支廳管內職獵百名遊獵十名根室支廳管內職獵百二十名內三十名冬獵百名夏遊獵十名內五名夏獵ト定メ滿員ノ後願出ル者ハ鑑札ヲ與ヘス（十一年開拓使乙第二十一號布達ヲ以テ根室支廳管內職獵夏冬獵員ヲ改ム）

但シ十勝國及釧路國一圓並ニ膽振國勇拂郡植苗村字美々ヨリ四方ヘ四里ツ、ハ鹿種繁息ノ爲メ該地在籍舊土人ノ外ハ當分出獵スルヲ許サス（十三年三月開拓使上申ヲ以テ但書改正）

第五條 免許鑑札ヲ受ケタル者ト雖モ毒矢ヲ以テ獵殺スルヲ禁ス

第六條 鑑札ハ一期限ノミ効アリトス且ニ己ノ用ト爲スヘキモノニシテ貸借賣買讓受スルヲ禁ス

第七條 獵業ハ根室國一圓並北見國ノ内網走紋別常呂斜里ノ四郡ハ

五月一日ヨリ十月三十一日マテ其他ハ九月一日ヨリ翌年二月二十八日閏年ハ二マテ一期限トシ右期限ノ外ハ出獵ヲ禁ス

但免許鑑札ハ毎年三月五日限リ最初受取タル地方廳ヘ返納スヘシ

第八條 鑑札ヲ與フヘガラサルモノ及ヒ銃獵禁制ノ場所ハ鳥獸獵規則第七條同第八條ノ通りタルヘシ

第九條 此規則ヲ犯ス者ノ罰則等ハ總テ鳥獸獵規則第十四條ヨリ第十七條マテノ通タルヘシ

（願書式略之）

鳥獸獵規則ハ本類ニ載ス

○北海道臘虎并膾肭獸獵獲ノ禁明治十七年五月第拾六號布告
自今北海道ニ於テ臘虎并膾肭獸ヲ獵獲スルヲ禁ス犯ス者ハ刑法第三

北海道臘虎并膾肭獸獵獲ノ禁

百七十三條ニ照シテ處斷シ仍其獵獲物ヲ沒取ス之ヲ賣捌キタル者
ハ其代價ヲ追徵ス
但農商務卿ノ特許ヲ得タル者ハ此限ニアラス

○北海道水產物取締明治十七年五月
第拾貳號布告

北海道ニ於テ納稅スヘキ水產物ヲ取獲セントスルモノハ其地ノ管廳
ヘ願出許可ヲ受クヘシ違フモノハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍
ホ其物品ヲ沒收ス之ヲ賣捌キタルモノハ其代價ヲ追徵ス

○魯領權太島漁業ヲ許ス明治九年三月
第二十五號布告

十一年第九號布告海外
免狀ヲ申シ海外旅券規則
ニ據ラシム十一月二月外
務省第一號布告海外旅
規則參看第二類ニ載ス

露西亞國ト交換相成候樺太島ニテ從來漁業營居候者ハ舊漁場ニ於テ
引續營業不苦候條此旨布告候事
但同所ヘ出張ノ節ハ人民船舶共尋常海外渡航ノ通航海公證願受所
持可致事

○屠牛取締明治四年八月
大藏省布達

近來肉食相開候ニ就テハ屠牛渡世ノ者屠場ノ儀ハ人家懸隔ノ地ニ取
設ケ病牛死牛トモ不賣鬻樣嚴重取締可申就テハ左ノ二ヶ條相守各地
方官ニ於テ雛形ノ鑑札製造致シ屠場取開ノ場所巨細取調ノ上相渡シ
「當省」ヘ追テ可届出事
一牝牛ハ蕃息ノ基本ニ付總テ屠殺不致樣取締可致事
但十二三歲以上孕牛ニ難相成分ハ不苦候事

牧畜ノ事務ハ十四年第八
拾五號通テ以テ農商務省
ニ屬ス

一諸開港場ニ於テ輸出ノ節取締ノ儀ハ其地方官ニ於テ見込相立取締可致事

但見込ノ趣追テ可申出事

右ノ通候事

(免許鑑札雛形畧之)

○牝牛屠殺取締大藏省十一月五十七號達
近來肉食相開候ニ付テハ牛種蕃息ノ儀ハ最注意不致候テハ不相成ニ付辛未八月中牝牛屠殺取締ノ儀及布達候處兎角目下ノ細利ニ趨リ小壯ノ牝牛屠殺販賣ノ者モ有之哉ニ相聞此儘差置候テハ將來牛種減耗ニ立到リ殖産ノ上ニ於テ不容易妨害可相成ニ付右布達ノ旨意ニ基キ管内牝牛屠殺取締方法相設其旨租稅寮ニ可届出此旨相達候事

○牛馬買賣規則明治五年十一月三十號布告

沿革略記

明治三年三月民政部省ヨリ牛馬買賣渡世ノ者ニ鑑札ヲ下付シ冥加金ヲ納メシム○四年十二月大藏省達ヲ以テ冥加金ノ額ヲ改ム○五年十一月第三百三十號布告ヲ以テ牛馬買賣規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

牛馬買賣渡世ノ者免許稅ノ儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ相達候處今般別紙規則書ノ通相定候條各管内共區々ノ取計無之様可致候事

(別紙)

牛馬買賣渡世ノ者免許稅ノ儀昨辛未十二月相達候處此度御詮議ノ次第モ有之別紙ノ通規則相定候條是迄相渡候免許鑑札ハ引換相渡シ引上ケ候分ハ各府縣廳ニ於テ取纏メ燒捨其段可申立候其餘ハ規則ニ隨ヒ處置可致事

壬申十月

大藏省

(別紙)

牛馬買賣規則

第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世ノ者取調牛馬壹鼻綱ニ付免許鑑札壹枚相渡可申事

但壹鼻綱ハ牛馬共七疋ニ限リ鑑札壹枚ヲ所持スル者旅行ノキハ七疋以內貳枚ヲ所持スル者ハ十四疋ニ限ルヘシ其餘準之可申事

第二條 免許鑑札新規願受候者六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納税シ廢業ノ者七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納税可致事(七

第四十五號布告ヲ以テ改正)

第三條 免許鑑札萬一燒失流失盜難等ニテ失ヒ候モノ有之其段申出候ハ、事實取調鑑札相渡可申事

第四條 免許鑑札壹枚ニ付一ケ年税金一圓上納可致事

但右税金前半年分ハ一月三十一日限後半年分ハ七月三十一日限各管廳へ取立租税「寮」へ上納可致尤新規免許ノ者ハ其都度半額

直ニ取立上納可致候事(八

第五條 免許鑑札燒印并押切判ハ錐形ノ通其管轄所ニテ製造致シ各

稜人共へ相渡可申事

但鑑札相渡次第稜人共國郡町村名及ヒ名面等詳細取調右鑑札印鑑相添當省へ可差出事

第六條 右様取締相立候上ハ向後無鑑札ニテ賣買不相成萬一無鑑札

ニテ密々賣買候者有之相顯ルニ於テハ牛馬共取上ケ免許税十倍ノ科料可申付事

但密賣買候者他ヨリ見出シ訴出ルニ於テハ其訴主へ取上ケ牛馬拂代金ノ十分ノ二褒美トシテ被下候事

第七條 取上牛馬拂代并科料金等ノ儀ハ第四條但書ニ照準上納可致事

第八條 此規則施行ニ付候諸入費ハ一ケ年試驗ノ上可申立事

第九條 免許鑑札ハ貸借決テ不相成候事(七

但免許鑑札借受賣買スル者ハ規則第六條密賣買ノ廉ニ照シ處分可致貨渡シ候者ハ免許税五倍ノ科料可申付事

十四年第七十二號布告前例處斷力登看以下條之第十四類ニ載ス

右ノ鑑札水火盜難又ハ過誤等ニテ遺失或ハ毀損候節ハ其旨管轄廳
へ届出新規鑑札可申受事(八年第六百六十六號布告ヲ以テ但書共追加)
但手數料トシテ鑑札一枚ニ付金貳拾錢可相納事
(雛形略之)

○北海道牛馬賣買規則明治十一年十二月開拓使乙第廿九號布達

牛馬賣買規則別紙ノ通相定明治十二年一月ヨリ施行候條此旨布達候事

(別紙)

牛馬賣買規則

第一條 牛馬賣買營業ノ者牛馬ニ鼻綱ニ付免許鑑札一枚宛申受

但壹鼻綱ハ牛馬共七疋ニ限リ鑑札一枚所持ノ者旅行ノ時ハ七匹以内ニ枚所持ノ者ハ十四匹以内トス其餘之ニ準スヘシ

第二條 免許鑑札ヲ新ニ申受ル者六月以前ハ全年分七月以降ハ

半年分納稅シ廢業ノ者七月以降ハ全年分六月以前ハ半年分納

稅スヘシ

第三條 免許鑑札一枚ニ付一ケ年稅金一圓宛上納スヘシ

但稅金ハ毎年兩度ニ半額ツ、前半年分ハ一月三十一日限後

半年分ハ七月三十一日限納付シ新ニ申受ル者ハ其都度半額

即納スヘシ

第四條 免許鑑札水火盜難又ハ過誤等ニテ遺失或ハ毀損候節ハ

其旨管轄へ届出新規鑑札申受ヘシ

但鑑札一枚ニ付手數料金貳拾錢上納スヘシ

第五條 免許鑑札ヲ所持セスシテ密ニ賣買スル者ハ其牛馬ヲ官

沒シ及鑑札稅十倍ノ科料ヲ徵收スヘシ

第六條 免許鑑札ヲ借受ケ賣買スル者ハ第五條ニ同シ其貸渡ス

者ハ鑑札稅五倍ノ科料ヲ徵收スヘシ

十四年第七十二號布告前
例處斷方登看以下條之第
十四類ニ載ス

第七條 第五條第六條ノ犯者ヲ見認メ訴出ル者ハ本犯科料ノ半額ヲ與フヘシ

○ 度量衡改定規則 明治九年二月 第拾七號布告

度量衡ニ器別紙種類表ノ通改定候條左ノ規則ノ通可相心得此旨布告候事

度量衡改定規則

第一條 三器改定ニ付各地方ニ三器製作所并賣捌所ヲ設ケ製作所ニ於テ製作セル新器來ル三月十五日ヨリ賣捌所ニ於テ發賣爲致從前ノ枴坐秤坐ハ同日ヨリ廢止候事

第二條 各地方ニ舊器改所ヲ設ケ候條從前所持ノ三器來ル三月十五日ヨリ十二月廿五日マテニ右改所へ差出シ檢査ヲ受クヘシ右期日

ナ過キ檢印ナキ器ヲ商業上ニ用フルヲ禁ス時宜ニ依リ掛リ官吏商家ニ入り用器ヲ視察スヘキ事

但改所ニ於テ檢査ノ上新器ニ適合セル分ハ檢印シ廢スヘキ分ハ廢ノ字ヲ印シ總テ所持人ニ下ケ戻スヘシ

第三條 製作所賣捌所官許ノ外三器製作賣捌一切不相成事

但尺ハ尺杖等一時使用ノ爲メ目盛致シ枴ハ芋烏芋等ヲ量ル爲メ箱ヲ製シ又ハ賣買スルハ苦シカラス

第四條 尺度秤量ノ目ヲ盛直シ枴ノ緣鐵弦鐵ヲ打替ヘ斗概ヲ修覆スル等ハ必ス製作所へ差出スヘク秤量ノ緒紐ヲ附替フルハ製作所又ハ賣捌所ニ差出スヘシ其他ノ人自儘ニ致シ候儀不相成事

第五條 舊新器共檢印アルヲ賣拂度者ハ必ス賣捌所ニ可申出事 但秤ノ錘皿又ハ枴ノ緣鐵弦鐵等ヲ取離シ古鐵トシテ賣買スルハ苦シカラス

第六條 第二條以下ノ禁令ヲ犯ス者ハ其品取上テ律ニ照シテ處斷ス

刑法第二編第四章第七節
第十四條第七十二號布告附
例處斷方參看第十四類ニ
載ス

へ半事

(種類表略之)

十四年第七十二號布告
例處斷方參看第十四類ニ
載ス

○西洋形權衡ニ御國量目ヲ割直シ使用方明治六年十月
第三百三十八號布告
御國量目ヲ割直シ候西洋形權衡ニ大藏省ノ極印無之分相用候者
有之ニ於テハ吃度咎メ可申付候條此旨布告候事

但螺旋機關等ニテ其概量ヲ知ルノミノ器具ハ此限ニアラザル事

○西洋形權衡檢査印章改定明治十四年五月
第三十二號布告
西洋形權衡製作檢査印章左ノ通改定候條自今左ノ印章ヲ證トシ

從前ノ權衡ト同様相用フヘシ此旨布告候事
(檢査印章略之)

○石油取締規則明治十六年二月
第六號布告

沿革略記明治十四年八月第四十號布告ヲ以テ石油取締規則ヲ
制定ス○十六年第六號布告ヲ以テ改定ス是レ現行法
ナリ

明治十四年八月第四十號及同年九月第五十號布告石油取締規則左ノ通
改定ス

但施行日限ノ儀ハ明治十五年八月第四十四號布告ノ通りタルヘシ(十六
年第十號布告ヲ以テ施行日限
ノ儀ハ追テ布告ナスマテ延期)

第一條 石油ヲ分テ二種トシ閉塞發焔試驗法ヲ用ヒ攝氏驗溫器三十
度(華氏八十六度)以上ノ溫度ニ達セザレハ發焔セサルモノヲ第一種トシ三
十度ニ達セスシテ發焔スルモノヲ第二種トス

第二條 點燈用ニ供ズルハ第一種ノ石油ニ限リ第二種ノ石油ハ醫療
製藥調劑及ヒ物理學化學工藝上ニ於テ業用ニ供スルノ外之ヲ用フ
ルヲ許サス

第三條 石油營業者ヲ分テ墾業者精製者問屋及ヒ小賣商ノ四類トス

石油取締規則

六百

其營業者ハ都テ管轄廳東京府下ノ警視廳ハ許可ヲ受クヘシ但ニ類以上兼業
スルトキハ別ニ其許可ヲ受クヘシ

第四條 石油ノ種類ハ内務卿ノ必要トスル地方ニ於テ検査員ヲシテ
之ヲ検査セシムヘシ

石油ハ検査済ノ證アルモノニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ許サス但
壙業者ヨリ精製者ニ販賣スルハ此限ニアラス

第五條 検査済ノ石油ヲ家屋内ニ貯藏スルヲ得ルハ第一種ノ石油五
石以内第二種ノ石油五斗以内トシ容器ハ漏出ノ虞ナキ不燃質物ニ
限ルヘシ

第六條 石油營業者前條制限外ノ石油井ニ検査未済ノ石油ヲ貯藏ス
ル場所建物及ヒ精製所ノ構造方ハ都テ管轄廳東京府下ノ警視廳ノ認可ヲ受
クヘシ

第七條 第二種ノ石油ハ精製者問屋ヨリ直ニ需用者ニ販賣シ小賣商
ハ第一種ノ石油ニ限り販賣スルヲ得ルモノトス

第八條 第二種ノ石油ヲ販賣スル者ハ購買者ヨリ其數量及ヒ需用ノ
趣意年月日住所氏名ヲ詳記シタル書付ヲ取り置キ一年間保存スヘ
シ但販賣時限ハ日出ヨリ日没マテトス

第九條 石油ヲ運搬スルトキハ其石油タルコトヲ表記スヘシ但其積
卸ニ必用ナル時間ノ外物揚場又ハ路傍ニ置クヘカラス

第十條 此規則ヲ犯シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

○銃砲取締規則 明治五年正月 第二十八號布告

銃砲取締規則別紙之通被定候條來ル四月ヨリ規則之通可相守事
(別紙)

銃砲取締規則

第一則 大小銃一并彈藥類商賣ノ儀ハ府縣共定員商賣ノ外取扱致間

以テ火藥取締規則ヲ制定
ス故ニ本則中彈藥ニ關ス
ル件ハ總テ消滅ス

八年第百一十一號達ヲ以テ
銃砲取締ヲ内務省管理ニ
屬ス

八年第十二號布告ヲ以テ陸軍省中武庫司ヲ廢ス

敷右定員ノ商賈ハ其地方管廳ニ於テ精選ノ上免許狀可差遣事
但東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ニ於テ管轄スヘキ事

免許商賈ノ定員

一府下 各五員

一縣下 各二員

一鎮臺本分營下 各一員

但府縣廳下開港場等ニアルハ別ニ設ケス

一開港場 各五員

右免許差遣候商賈ノ姓名住所等東京「武庫司」ヘ届クヘキ事

第二則 免許商人タリトモ軍用ノ銃砲「彈藥」類ヲ竊ニ賣買不相成賣渡候節ハ買主ヨリ官ノ免手形ヲ受取其員數ヲ照シ賣渡可申又買入ノ節ハ其管廳ヘ願出免手形ヲ受其員數ヲ以テ買取可申事

但東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ヘ願出申事

免許商人ハ陸海軍准士官以上ノ武官ヨリ其所有ノ軍用銃「并」ニ其

彈藥「類」ヲ買入レントスルトキハ買入願書ニ其賣主ノ連署ヲ爲サシムヘキ事(十三年第八號布告ヲ以テ本項追加)

第三則 免許ノ商人其賣買ノ銃砲「彈藥」類ハ多少ヲ論セス買取賣渡共其主人ノ姓名其物品ノ員數等明細附記シ軍用ノ物ハ免手形相添毎月其管廳ヘ可差出其廳ヨリ毎月十日ヲ限リ管轄「鎮臺」ヘ差送可申事

但「諸鎮臺」ヨリ毎歲正月七月兩度半ケ年明細帳ヲ以テ東京「武庫司」ヘ差送可申尤東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ニ於テ取締可致事

第四則 「彈藥」ノ儀ハ假令些少ノ品タリトモ唯便利ノミナ計リ勝手ノ場所ヘ差置間敷兼テ其地方管廳ヘ願出差圖ヲ受相圍可申事

但東京大坂ノ儀ハ「武庫司」ヘ願出ヘキ事

第五則 華族ヨリ平民ニ至ル迄免許銃類ヲ除クノ外軍用ノ銃砲「并」彈藥「類」ヒストールニ至ル迄私ニ貯蓄不相成就テハ是迄銘々所持致居候軍用銃砲ハ一々其管廳ニ持出東京大坂ハ武庫司ヘ持出別紙銃砲改刻印

八年内務省乙第百四十四號達ヲ以テ管廳ヨリノ届出ヲ前後半年分チ區別シ毎年一月七月兩度トナス

式ノ通り番號官印ヲ受可申他人へ譲リ與へ候節ハ第二則ノ手續ニ從フヘシ

〔但彈藥買入致シ度者モ亦二則ノ通りタルヘシ〕

銃砲改刻印ノ式

千支何番 〔武庫司〕或ハ何府縣

右所持ノ人名番號等逐一書記シ置管轄鎮臺へ届出鎮臺ヨリ東京〔武庫司〕へ差送り可申事

免許ノ銃類

一和銃四文目八分玉以下

一各國諸獵銃

但西洋獵銃ノ儀ハ其玉目稍大ナントモ霰彈ヲ用ユルモノハ之

ヲ許ス

右獵用銃所持ノ者ハ其銃名員數等巨細附記シ其管轄へ届出其廳ヨ

リ東京〔武庫司〕へ差出可申東京大坂ハ所持ノ者ヨリ直ニ武庫司へ届出ヘシ萬一軍用獵用

銃ノ差別難相辨者官へ尋出候得ハ検査ノ上免許ノ證印ヲ据へ可相

渡事

第六則

六年第二十五號布告鳥獸獵
〔免許取締規則ニ本則ヲ引換〕

第七則 銃砲〔彈藥〕下々ニ於テ猥リニ製造不相成候尤モ新ニ奇巧便

利ヲ發明シ爲試製作致度者ハ其管轄へ相願管轄〔鎮臺〕へ届出免許

ヲ可受事

但製作其宜キニ適ヒ最モ便利ナル者ハ〔鎮臺〕ヨリ〔武庫司〕へ差送

リ検査ヲ遂ケ採用可相成分ハ西洋免許ノ法ニ倣ヒ何分ノ御沙汰

可有之事

是迄銃砲〔并彈藥〕類賣買致來候者ハ現今所持ノ物品員數等無遺漏書

記シ管轄廳へ爲差出其廳ヨリ東京〔武庫司〕へ可差出事

但東京大坂ノ儀ハ賣買ノ者ヨリ直ニ〔武庫司〕へ可届出事

右之通ニ候事

六年第二十五號布告ハ十年第十一號布告ヲ以テ改正

○銃砲取締規則違犯者處分明治五年九月
第二百八拾二號布告
銃砲取締ノ儀ニ付別紙ノ通被相定候條此旨相達候事

(別紙)

一銃砲取締規則ニ違銃砲「彈藥」類ヲ竊ニ所持シ且致取扱候者有之節ハ各地方ニ於テ其品取上ケ更ニ五十錢ノ過料可申付候事
但取締向ニ關係無之者見當リ訴出候ニ於テハ犯人過料ノ半金ヲ可被下候事

一免許ヲ得スシテ銃砲「彈藥」ヲ製造スル者ハ其品取上ケ更ニ三圓以內ノ過料可申付事(七年第百三拾二號)
但書同前

右取上候品東京大坂ハ「武庫司」其他ハ所管ノ「鎮臺」へ可差出事

○銃砲外國人ヨリ買入手續明治五年六月
第百八十五號布告

銃砲取締規則中第二則開港開市場ニ限り自今左ノ通可取扱事
一開港開市場ニ於テ免許商人ノ輩銃砲「并彈藥」類外國人ヨリ買

刑法第二編第三章第五節
銃砲

入度儀願出候節ハ其管轄廳ニ於テ嚴重取調ヘ一日管廳へ買上然ル後願出ノ商人へ可相渡賣拂ノ節モ同様管廳ニ於テ致取引可遣事

但免許商人ヨリハ買入賣渡共其都度々々員數書ヲ以テ開港開市場管廳へ願出處置ヲ可受事

○銃砲取締管理ヲ改ム八年六月
第百一十一號達
今般銃砲「彈藥」取締ノ儀內務省へ管理被仰付候ニ付テハ退テ相達候儀モ可有之候得共差向キ從前規則ノ通相心得取締可致尤右規則中是迄陸軍省及ヒ各鎮臺等へ申出候分ハ總テ內務省へ可申出其他管理替ニ付牒觸ノケ條ハ廢シ候儀ト可心得此旨相達候事
○武官所有ノ軍用銃賣買取規則十三年三月
第百二十三號達
陸海軍武官所有ノ軍用銃ハ明治五年正月第二十八號布告ニ依リ管轄廳ノ検査番號ヲ受來候處自今准士官以上ノ武官ハ左ノ規則ニ據ルヘシ此旨相達候事

第一條 武官所有ノ軍用銃賣買取規則
第一條 陸海軍省ニ於テハ武官所有ノ軍用銃并其彈藥類買入ノ節交付スヘキ買入免狀ヲ定メ置キ豫メ其印影等照會ノタメ使

十四年第一號通ヲ以テ發
視圖ヲ區ク以下做之

府縣應^{東京ハ警}通知ス可シ

第二條 武官軍用銃並其彈藥類ヲ買入ル、時ハ前款ノ免狀ヲ受
取之ヲ該地ノ免許商人ニ交付シテ其買入ヲ爲スヘシ

第三條 武官轉任又ハ免官スル時ハ其奉職中所有セシ銃器ハ其
銃名^{其印アラ}記載シ使府縣應^{東京ハ警}届出常則ニ從ヒ其
取締ヲ受クヘシ

第四條 武官奉職中所有ノ軍用銃及ヒ其彈藥類ヲ人民ニ賣渡サ
ントスル時ハ買受人ヨリ其使府縣應^{東京ハ警}差出スヘキ願
書ニ連署スヘシ

○銃砲類外國人ト賣買出願取扱方^{七年七月九號通}
銃砲并彈藥類外國人ヨリ買入ノ儀ニ付明治五年六月第百八十五
號布告ノ趣モ候處自今銃砲并彈藥類外國人ト賣買ノ儀免許商人
ヨリ願出候節ハ其管應ヨリ陸軍省ニ申請ノ上可取計此旨相違候
事

○外國人ニ獵用銃器類賣渡方手續^{十一年五月七號通}
銃砲彈藥賣買免許商人外國人ト銃砲彈藥類賣買願出候節取扱方
ノ儀ハ明治七年七月第九十九號八年六月第百拾壹號達ノ趣有之候處
今般第拾壹號布告ノ趣モ有之ニ付自今銃獵免狀付與有之外國人
ニ獵用ノ銃器彈藥類賣渡シ候儀ハ其應限リ聞届候儀ト可心得此
旨相違候事

但免許商人ヨリハ其姓名數量等ヲ記載シ其時々爲届出候様可
取計事

○火藥取締規則 明治十七年十二月
第三十一號布告

沿革略記 明治四年十月兵部省達ヲ以テ火藥運送規則ヲ定ム○
五年正月第二十八號布告ヲ以テ銃砲取締規則ヲ定ム
彈藥類賣買モ該規則ニ因テ取締ラシム○同年六月第百八十五
號布告ヲ以テ彈藥外國人ヨリ買入手續ヲ定ム○十一年五月第
十一號布告ヲ以テ銃獵免許ノ者等ト彈藥雷管賣買手續ヲ定
ム○十四年六月內務省乙第廿九號達ヲ以テ暴發物ダイナマ
イトノ類モ銃砲取締規則及火藥運搬規則ニ據リ取扱ハシム
○十七年十二月第三十一號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ火藥取締
規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

火藥取締規則別冊ノ通制定ス

但從前ノ成規中此規則ニ矛盾スルモノハ總テ廢止ス

(別冊)

火藥取締規則

第一章 總則

第一條 凡火藥劇發火藥棉火藥、ナイトログリセリン、ダイナマイト、雷汞、其他劇發質ノ物品ハ人民ニ於テ製造スルコトヲ禁ス但烟火マツチノ類ハ此限ニ在ラス

第二條 火藥類火藥劇發火藥ヲ云フノ賣買營業ヲ爲サントスル者ハ管轄廳東京府ハ警視廳ニ願出免許鑑札ヲ受ク可シ但營業者ハ一管内ニ十五人以内トス

第三條 火藥類ハ營業者ニ限り陸軍海軍兩省ヨリ其貯藏品ヲ拂下ク可キモノトス

第四條 管轄廳東京府ハ警視廳ニ於テ火藥類ノ檢査ヲ必要ト認ムル時ハ營業者タルト否トヲ問ハス警察官ヲシテ之ヲ檢査セシムルコトアル可シ

第五條 戰時若クハ事變ニ際シテハ陸軍卿海軍卿ハ火藥類ノ拂下ケヲ停止シ内務卿ハ其賣買運搬ヲ停止スルコトアル可シ

第六條 火藥類ハ官許ヲ得ルニ非サレハ日出前日没後ニ於テ賣買運

搬其他荷造等ヲ爲ス可カラス

第二章 賣買

第七條 營業者ハ毎月買受ケタル火藥類ノ種類數量ヲ記シ證書アレハ之ヲ添翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第八條 營業者ニ非シテ所有ノ火藥類ヲ賣ラントスル者ハ營業者ニ之ヲ賣渡ス可シ營業者ハ其賣渡證書ヲ取り置ク可シ

第九條 營業者ハ銃砲用又ハ坑業土工烟火其他職業用ニ限り火藥類ヲ賣渡ス可キモノトス但十六歳未満若クハ白痴瘋癲ノ者ニハ之ヲ賣渡スコトヲ許サス

第十條 火藥類ヲ買受ントスル時銃獵若クハ烟火製造ノ免許ヲ得タル者ハ其免狀ヲ營業者ニ示シ銃砲用ノ爲メニスル者ハ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡シ陸海軍軍人ノ射的用ニ供スル者ハ其省ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡ス可シ但一回ニ左ノ數量ヲ超ルコトヲ許サス

小銃用 火藥 二百目 雷管 五百個
 船舶設備銃砲用 大砲一門ニ付 火藥 五十發分 導火管類 七十個
 小銃一挺ニ付 火藥 百發分 雷管 百五十個
 烟火製造用 火藥 五貫目

坑業土工其他職業用ニ供スル火藥類ヲ買受ケントスル者ハ其旨趣及種類數量並ニ使用ノ場所ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ營業者ニ渡スコシ

第十一條 營業者ハ買受人ノ免狀ヲ檢シ若クハ許可證ヲ受取り火藥類ヲ賣渡スコシ但第十條ノ數量ヲ超ルコトヲ許サス

第十二條 營業者ハ毎月火藥類買受人ノ住所氏名及其賣渡シタル種類數量年月日ヲ記シ證書アレハ之ヲ添ヘ翌月十日迄ニ所轄警察署ニ届出可シ

第三章 貯藏

第十三條 火藥類ハ火藥二百目雷管導火管類五百個迄ハ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得

營業者ハ前項制限ノ外火藥拾貫目劇發火藥壹貫目雷管導火管類壹萬個迄烟火製造人ハ火藥五貫目劇發火藥五百目迄ハ管轄廳東京府警視廳ノ許可ヲ受ケ倉庫ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得其數量ヲ超ル時ハ火藥庫ノ外之ヲ貯藏スルコトヲ許サス火藥五百貫目以上劇發火藥五拾貫目以上ハ火藥庫ト雖モ之ヲ貯藏スルコトヲ許サス

第十四條 火藥類ヲ一庫内ニ貯藏スル時ハ其種類毎ニ不燃質物ヲ以テ之ヲ區畫スコシ

第十五條 火藥庫ヲ建設セントスル者ハ其位置并ニ建設ノ方法書及近傍ノ地圖ヲ添へ管轄廳東京府警視廳ニ願出許可ヲ受ケ可シ

第十六條 火藥庫ハ皇居離宮ノ區域ヲ距ル十町以内ノ地ニ建設スルコトヲ許サス

第十七條 火藥庫ハ皇陵社寺公園家屋火ヲ取扱フ場所宅地國道縣道鐵道電信柱汽船ノ通スヘキ河湖及他ノ火藥庫境界トノ中間ニ五中間以上ノ距離ヲ有ツ可シ

第十八條 火藥庫ハ土藏又ハ煉瓦造ニシテ家根ハ輕量ノ不燃質物ヲ用ヒ内部ニハ鐵釘石瓦ヲ露ハサス窓ニハ透明ノ硝子ヲ用フ可カラズ又避雷針ヲ設ケ庫外ノ周圍ニ二間以上ヲ隔テ、高サ六尺以上ノ土堤ヲ築キ其入口ニ火藥庫ト書シタル標木曲尺六尺以上ニシテ五寸角以上ノモノヲ建ツ可シ

第十九條 火藥庫ヨリ十四間以内ノ地ニ材木草秣其他燃質物ヲ蓄積ス可カラス又五十間以内ニ於テ火ヲ取扱フ建造物ヲ設ケ若クハ瓦斯ノ傳送管ヲ施シ若クハ發火質ノ物品ヲ蓄積ス可カラス

第二十條 坑業土工其他多量ノ火藥類ヲ要スル爲メ其事業中假貯藏所ヲ設ケントスル者ハ第十七條ニ掲ケタル距離ヲ二倍シ第十五條ニ據リ管轄廳東京府ハ警視廳ニ願出許可ヲ受ク可シ但貯藏ノ數量ハ火藥貳百貫目劇發火藥三拾貫目ヲ超ルコトヲ許サス

第二十一條 烟火製造所ハ家屋若クハ火ヲ取扱フ場所ヨリ十間以上ノ距離ヲ有ツ可シ又五貫目以上ノ火藥類ヲ置ク可カラス

第四章 運搬

第二十二條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬セントスル時ハ其種類數量運搬ノ日時場所及水陸通路ノ名稱ヲ記シ所轄警察署ノ許可證ヲ受ケ之ヲ携帶シ運搬畢ラハ直ニ之ヲ返納ス可シ若シ其警察署管轄外ノ地ニ運搬スル時ハ其地ノ警察署ニ之ヲ納ム可シ

第二十三條 五貫目以上ノ火藥類ヲ運搬スル時ハ鐵釘鐵輪ヲ用ヒカ
ル木製銅製若クハ亞鉛製ノ器ニ入レ其外部ハ筵包若クハ繩卷ト爲シ毛布類ヲ以テ之ヲ覆ヒ赤地ニ火藥ノ二字ヲ白書シタル小旗陸路曲尺縱二尺横二尺五寸水路ノ小旗建テ護送人ヲ附ス可シ但船積スル時ハ明治六年ハ第貳百九拾貳號布告危害品船積法ニ從フ可シ
第二十四條 火藥類ヲ運搬スルニハ火氣ニ注意シ休泊ノ時ハ安全ナル場所ヲ撰ヒ看守人ヲ附ス可シ

第五章 罰則

第二十五條 私ニ火藥類ヲ製造シ若クハ販賣シタル者ハ軍用品ニテ

六年第百九十二號布告
危害品船積法則ハ第二類
ニ載ス

ヲスト雖モ刑法第五百十七條ヲ適用シ私ニ之ヲ所有シタル者ハ刑法第六十條ヲ適用ス

第二十六條 刑法第五百十八條第五百十九條第六十一條ハ前條ノ犯罪ニ關シタル者ニモ亦之ヲ適用ス

第二十七條 私ニ火藥庫又ハ假貯藏所ヲ建設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第四條ノ檢査ヲ拒ミ又ハ第五條ノ停止ヲ犯シテ賣買運搬シ第九條第十條第十一條第十三條第十九條ニ違犯シ又ハ第二十二條ノ制限ヲ超テ貯藏シ又ハ第二十二條ニ違犯シタル者又ハ營業者賣買ヲ除クノ外火藥類ヲ讓受若クハ讓渡シタル者ハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第六條第七條第八條第十二條第十四條第十八條第二十二條第二十三條第二十四條ニ違犯シタル者ハ一圓以上二圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十條 營業者此規則ニ違犯シタル時ハ其情狀ニ因リ行政ノ處分ヲ以テ營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

附則

一 従前免許ヲ得タル火藥製造人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄其營業ヲ差許シ又同日迄ニ火藥製造諸器械及火藥類ノ現貯藏數量ヲ記シ管轄廳東京府ハ警視廳ニ願出ルニ於テハ相當ノ代價ヲ以テ之ヲ買上ク可シ

一 従前免許ヲ得タル彈藥免許商人ハ來ル明治十八年二月二十八日迄火藥賣買營業ヲ差許シ従前免許ヲ得タル烟火製造所ハ右同日迄其製造ヲ差許ス又従前火藥類ヲ貯藏シタル者ハ來ル明治十八年一月三十一日迄其貯藏ヲ差許ス其日限ヲ過クルトキハ總テ此規則ニ從フヘシ

○古物商取締條例 明治十六年十二月
第五十號布告

古物商取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年二月一日ヨリ施行ス

(別冊)

古物商取締條例

第一條 古物商トハ古道具、古本、古書畫、古着、古銅鐵、漬金銀ヲ賣買
スル營業者ヲ云フ

袋物屋、小間物屋、鼈甲屋、時計屋、飾屋、箔打屋、煙管屋ニシテ其營業ニ屬
スル古物ヲ賣買交換スル者及ヒ刀劍商ハ此條例ニ準據スヘシ

第二條 古物商ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 古物商物品ヲ賣買シ又ハ交換シタルトキハ警察官ニ於テ其
物品及ヒ賣主讓主ヲ調査スルニ差支ナキ様簿冊ニ記載シ且買主讓
受主ヲ詳ニスルコトヲ得タルトキハ之ヲ記載スヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得

ス但身元詳ナル者其證人タルトキ又ハ警察官若クハ巡查ノ認可ヲ
受ケタルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴瘋癲者及ヒ雇人雇主ノ家ヨリ物品ヲ買
取り又ハ交換スルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者
其證人タルトキハ此限ニアラス

官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章記號アル物品ハ其賣却シ得
ヘキコトヲ證明スル證人貳名以上アルニ非サレハ之ヲ買取り又ハ
交換スルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニヨリ無代價ニテ物品ヲ取戻
サル、コトアルヘシ

第六條 古物商ハ營業者タルト否トテ問ハス盜罪詐欺取財ノ罪又ハ
刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ買
取り又ハ交換シ及ヒ寄藏スルトキハ警察官ノ許可ヲ受クヘシ違フ
者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮又ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金

ニ處ス

第七條 古物商ハ自宅又ハ許可ヲ受ケタル市場及ヒ賣主讓主ノ居宅ノ外ニ於テ物品ヲ買取り又ハ交換スルコトヲ得ス

第八條 刀劍又ハ之ヲ仕込ミタル器具ハ身元詳ナラサル者及ヒ盜罪賭博ノ處斷ヲ受ケタル者ニ賣渡讓渡シ又ハ露店及ヒ路傍ニ於テ賣渡讓渡スコトヲ得ス

第九條 古物商物品ヲ他府縣ニ運送セントスルトキ又ハ他府縣ヨリ受取りタルトキハ其物品ノ目錄ヲ所轄警察署ニ届出ツヘシ
警察官ハ時宜ニ依リ荷作ヲ解キ物品ヲ検査シ之ヲ差押フルコトアルヘシ但費用ハ届人之ヲ擔當スヘシ

第十條 贓物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後二年内ニ類似ノ物品ヲ買取り又ハ交換シ及ヒ寄藏シタルトキ若クハ其以前ニ之ヲ得タルマ、所持シタルトキ

ハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ若シ届出テスシテ其理由ヲ辨解スルコト能ハサル者ハ第六條ノ刑ニ同シ

第十二條 物品ノ賣買交換ヲ記載シタル簿冊及ヒ品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若シ亡失シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ツヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ古物商ノ店舗ニ臨ミ物品及ヒ簿冊ノ検査ヲ爲シ時宜ニ依リ其物品ヲ差押ヘ又ハ時々簿冊ヲ差出サシメ之ヲ検査スルコトアルヘシ古物商ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 第二條第三條第四條第五條第七條第八條第九條第十條第十二條第十三條ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ貳圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第六條第十一條第十四條及ヒ刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル古物商ハ管轄廳東京府 警視廳ニ於テ三月以上三年以下ノ特別取締ニ付スルコトヲ得

第十六條 特別取締ニ付セラレタル者ハ尙ホ左ノ項目ニ從フヘシ

- 一 物品ヲ買取リ又ハ交換シタルトキハ其賣主讓主ノ住所氏名年齢及ヒ物品ノ形状徽章番號編柄摸樣
損所ノ類ヲ云フ價額年月日時ヲ簿冊ニ記載スヘシ
- 二 日出前日没後ハ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及ヒ寄藏スルコトヲ得ス
- 三 營業者ニアラサル者ヨリ物品ヲ買取リ又ハ交換シタルトキハ其物品ヲ原狀ノ儘五日間保存スヘシ
- 四 物品ヲ賣渡シ又ハ交換シタルトキハ其物品ノ形状價額年月日時ヲ簿冊ニ記載シ且買主讓受主ノ住所氏名年齢ヲ知り得タルトキハ之ヲ記載スヘシ
- 五 毎月二度物品賣買交換ノ簿冊ヲ所轄警察署ニ差出シ其檢査ヲ受クヘシ
- 六 住所ヲ移轉シ又ハ旅行シ又ハ他人ヲ宿泊同居セシメントスルトキハ所轄警察署ノ認可ヲ受クヘシ

- 第十七條 前條ニ違背シタル者ハ三圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第十八條 特別取締ニ付セラレタル者第六條第十一條第十四條第十七條ニ依リ罰金ニ處セラレタルトキハ直ニ之ヲ納完セシム若シ納完セサル者ハ留置セラレ、コトアルヘシ
- 第十九條 古物商一年內ニ此條例ヲ再犯シタルトキハ行政ノ處分ヲ以テ其營業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得
- 第二十條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
- 第二十一條 此條例ヲ犯シテ買取リ又ハ交換シタル物品贓物ニ係ルモノハ營業者ニ依ルト否トテ問ハス警察署ニ於テ之ヲ追徴シテ被害者ニ還付スヘシ若シ被害者知レサルトキハ之ヲ領置シ一年ノ後官没ス
- 第二十二條 商業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ任スヘシ
- 第二十三條 此條例ヲ施行スルシ方法細則ハ警視總監府知事東京府ヲ除ク

縣令ニ於テ便宜取設テ内務卿ニ届出ツヘシ

○質屋取締條例明治十七年三月九號布告

質屋取締條例別冊ノ通制定シ明治十七年五月十五日ヨリ施行ス

(別冊)

質屋取締條例

第一條 質屋營業ヲ爲ス者ハ管轄廳東京府ハ警視廳ノ免許ヲ受クヘシ

第二條 質屋ハ質物臺帳ヲ備ヘ其紙數ヲ記シ所轄警察署ノ捺印ヲ受クヘシ

第三條 質物臺帳ニハ警察官ニ於テ質物、貸金、質入主及質入受戻入換ノ年月日ヲ調査スルニ差支ナキ様記載スヘシ但證人ヲ要スルトキハ質入主及證人ノ實印ヲ捺捺セシメ置クヘシ

第四條 身元詳ナラサル者ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス

第五條 十五年未滿ノ者白痴瘋癲者及雇人雇主ノ家ヨリ質物ヲ取ルコトヲ得ス但父母後見人雇主又ハ身元詳ナル者證人タルトキハ此限ニアラス

官廳、町村、學校、病院、社寺、會社ノ印章記號アル物品ハ其質入シ得ヘキコトヲ證明スル證人二名以上アルニ非サレハ之ヲ質物ニ取ルコトヲ得ス

前二項ニ違背シタル者ハ警察官ノ命ニ依リ元利金ヲ償フコト無ク質物ヲ取戻サル、コトアルヘシ

第六條 盜罪詐欺取財ノ罪又ハ刑法第二百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受ケタル者ヨリ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第七條 贓物ノ疑アル物品又ハ身柄不相應ト認メタル物品ヲ持來ル

者アルトキハ直ニ所轄警察署又ハ巡行ノ警察官巡査ニ密告スヘシ
第八條 流質物ヲ賣拂ハントスルトキハ五日以前ニ其物品目錄ヲ所
轄警察署ニ差出スヘシ

第九條 流質物ヲ賣拂ヒタルトキハ警察官ニ於テ其物品代價及買
主ヲ調査スルニ差支ナキ様流質物賣拂帳ニ記載スヘシ

第十條 贓物ノ品觸アルトキハ到達シタル年月日時ヲ其品觸寫書ニ
附記スヘシ

第十一條 品觸到達以後一年內ニ類似ノ物品ヲ質ニ取り又ハ寄藏シ
タルトキ若クハ其以前ノ質物及寄藏品中ニ類似ノ物品ヲ發見シタ
ルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十二條 質物臺帳流質物賣拂帳及品觸寫書ハ十年間保存スヘシ若
シ亡失シタルトキハ直ニ所轄警察署ニ届出ヘシ

第十三條 警察官ハ何時タリトモ質屋ノ店舗ニ臨ミ質物及帳簿ノ檢
査ヲ爲シ時宜ニ依リ其質物ヲ差押ヘ又ハ時々帳簿ヲ差出サシメ之

ヲ檢査スルコトアルヘシ質屋ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十四條 此條例ニ違背シ又ハ詐偽ノ届出ヲ爲シタル者ハ二百以上
二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 此條例ヲ一年內ニ再犯シタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ其營
業ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
第十七條 營業上ニ付テハ家屬又ハ雇人ノ所爲ト雖モ營業者其責ニ

任スヘシ

第十八條 此條例ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府
令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

○米商會所條例明治九年八月
第百五號布告

沿革略記 明治七年十二月第三百三十八號布告ヲ以テ從來各地方ノ米油限月賣買ヲ差止メ自今會社ヲ結ヒ米穀賣買相場取引ヲ爲サントスル者ハ是歲十月第七號布告株式取引條例ノ方法ニ倣ヒ會社規則取調其管轄廳ヲ經テ大藏省へ出願許可ヲ得ヘキモノトス○九年八月第五號布告ヲ以テ更ニ米商會所條例ヲ制定ス是レ現行法ナリ

從來各地方ニ於テ差許置候米油限月賣買一切差止メ自今米穀賣買相場取引致度者ハ會社規則取調可願出旨明治七年^{十二月}第三百三十八號ヲ以テ布告候處今般更ニ米商會所條例別冊ノ通相定候條營業致度者ハ右ニ照準可願出此旨布告候事

(別冊)

米商會所條例

第一條 緒言

第二節 米商會所ハ米穀流通ノ爲メ米商人ノ集會シテ賣買取引ヲ爲ス所ナリ而シテ協同結社之ヲ創立セントスル者ハ農商務卿^ノ免許ヲ請フヘシ(十四年第三十一號布告ヲ以テ本條例中ニ內務省及內務卿又ハ大藏卿トアルハ都テ農商務省及農商務卿ト改ム)

(以下倣之)

第三節 農商務卿ハ地方ノ景狀ヲ察シ之ヲ創立スルノ緊要ナルヤヲ考定シ之ヲ許可スルト否トシ權ヲ有ス

第二節 米商會所營業ハ五ヶ年ヲ以テ一期ト定ム右滿期ノ際猶之ヲ保續セント望ム者ハ更ニ其趣ヲ申立農商務卿ノ免許ヲ請フヘシ

第二條 會所創立ノ手續

第一節 米商會所ヲ創立スルニハ發起人十人以上ニシテ資本金ノ總額三萬圓以上タルヘシ

第二節 資本金ハ百圓ヲ以テ一株ト定メ發起人總員ニテ必資本金總高ノ半額以上ニ當ル株數ヲ所持スヘシ

第三節 會所ノ發起人ハ創立願書ニ此會所ヲ創立セントスル地方ノ從來米穀聚散ノ實況及ヒ將來賣買ノ目的ヲ詳悉シ各記名調印シ區戸長ノ奧書ヲ得會所創立證書及定款申合規則等ヲ添ヘ之ヲ地方官廳へ差出スヘシ

但創立證書中株主ノ責任ニ於テ有限或ハ無限ナルヲ明記スヘシ(十二年第四號布告)
(ヲ以テ但書追加)

第四節 地方官廳ニ於テハ願人共ノ身元行狀ヲ檢知シ且其目的ノ利害障礙ノ有無ヲ識別シ又會議所等ノ設ケアル地方ニ於テハ其集議ヲ取り併セテ之ヲ參酌シ相當ト思量スルキハ意見書ヲ添ヘ農商務卿ヘ具申スヘシ

第三條 開業ノ手續

第一節 發起人等ニ於テ會所創立ノ許可ヲ受ケタル時ハ直ニ其旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告シテ他ノ株主ヲ募ルヲ得

第二節 發起人ハ其募ニ應シタル株主等ト共ニ集會ヲ爲シ第五條ノ程限ニ從ヒ五人以上ノ肝煎及ヒ正副頭取ヲ選任シ其住所姓名年齢等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ地方廳ヲ經由シ農商務卿ノ認許ヲ受クヘシ農商務卿ハ時トシテ其改撰ヲ命スルコトアルヘシ(十三年第十九號布告ヲ以テ改正)

第三節 此頭取肝煎等ハ資本金總高ノ三分二ニ當ル現金或ハ日本政府ノ公債證書此公債證書ハ時々相場ノ昂低ヲ以テ増減スヘシト雖モ明治七年大藏省乙第廿八號達ノ價格ヨリ減少スヘカクテスナ其地方官廳或ハ國立銀行ニ預ケ公正ナル預リ證書ヲ乞受ケ其寫ヲ農商務卿ニ差出シ開業免狀ヲ請求スヘシ

第四節 會所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀ノ寫ヲ添ヘ何月何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告シ始メテ之ニ從事スルヲ得

第四條 社印ノ用方并印鑑差出方等ノ手續

第一節 開業免狀ヲ得テ其商業ヲ創メントスルニ當リ會所ノ印ヲ刻シ頭取以下諸役員ノ印ト共ニ其印影ヲ一纏メニシテ農商務卿ニ差出スヘシ若シ改刻スル者アルキハ其都度之ヲ差出スヘシ

第二節 會所ノ諸願伺届又ハ諸證書約定書及ヒ往復ノ文書等ニ至ルマテ會所一般ニ關スル事ハ其會所ノ名義ヲ用并會所ノ印ヲ捺シ頭取肝煎等之ヲ署名加印スヘシ

第五條 役員ノ程限

第一節 會所ノ役員ト稱スル者左ノ如シ

頭取

副頭取

肝煎

以下支配人書記等ノ名義ヲ以テ役員ヲ定ムルハ會所ノ都合ニ任
ス

第二節 會所ノ役員タル者ハ該會所ニ於テ賣買本人又ハ仲買人ト爲
ルヲ許サス

第三節 右役員ハ株主ノ定例總集會ノ節投票ヲ以テ十株以上ヲ所持
シタル株主中ヨリ肝煎ヲ撰舉シ肝煎ハ其同僚中ヨリ正副頭取ヲ推
撰シ共ニ其住所姓名年齢等ヲ詳記シタル書面ヲ以テ地方廳ヲ經由
シ農商務卿ノ認許ヲ受テ新舊交代セシムヘシ農商務卿ハ時トシテ
其改撰ヲ命スルコトアルヘシ(十三年第十九號
布告ヲ以テ改正)

第六條 役員ノ職務

第一節 頭取ハ會所ノ事務ヲ總轄シ他ノ役員ヲ指揮シ會所一切ノ責
ニ任ス

第二節 頭取ハ肝煎分掌ノ事務ヲ定ムヘシ

第三節 副頭取ハ頭取ヲ助ケテ其事務ヲ共成シ時トシテハ其代理ノ
任ニ當ルヘシ

第四節 肝煎ハ支配人書記等ノ役名ヲ議定シ其者等分掌ノ課程及ヒ
俸給ヲ定メ社中差違ノ事ヲ判決シ金穀ノ出納ヲ管理シ株主ノ衆議
ヲ取ラントスル事柄アル時ハ之ヲ招集スルコトアルヘシ

第五節 肝煎ハ毎月何回ト定メタル會議ノ議員トナルヘシ

第六節 肝煎ハ其同僚中又ハ頭取ニ於テ職任ニ不適當ノ行ヒアルカ
又ハ之ヲ怠ル者アルキハ臨時委員ヲ定メ次ノ肝煎會議ノ日ニ無名
投票ヲ以テ三分ノ二以上ノ説ニ從ヒ之ヲ退職セシムルコトヲ得

第七條 株主ノ權利制限及株式讓渡ノ手續

第一節 株主ハ會所ノ本主ニシテ會所資本ノ一部ヲ入金シ其入金高ニ應シタル株券ヲ所持シ以テ株數相當ノ權利ヲ有シ營業上ノ損益ヲ負擔スル者ナルカ故ニ時々ノ景況ニ着目シ金員及ヒ出納勘定帳簿ヲ檢閲セント求ムルノ權アリ

第二節 株主ハ肝煎ノ承諾ヲ得テ仲買人ト爲ルヲ得其場合ニ於テハ別段證人ヲ要セスト雖モ通常仲買人タルノ條件ニ適應スルヲ要ス
(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第三節 株主ハ何等ノ事故アルトモ會所解散ノ期ニ至ラサル時間ハ其株金ヲ取戻スヲ得ス

第四節 株主ハ肝煎ノ承諾ヲ受タル上ニテ其所持ノ株式ヲ賣渡シ讓與ヘ又ハ質入抵當ト爲スヲ得ヘシ但其質入抵當ト爲シタル時間ハ總會理事ノ時發言ノ權ナク又役員ノ撰舉ニ應スルヲ許サス

第五節 株主其所持ノ株式ヲ賣渡シ又ハ讓與ヲ爲ス時ハ其實買授受雙方ヨリ連印ノ證書ヲ會所ニ差出スヘシ會所ハ此證書ヲ受取りテ

ル時ニ株主帳ノ姓名ヲ書改ムヘシ若シ右手續ヲ爲サル間ハ證書賣買授受ノ効ナキ者トス

第八條 仲買人入社ノ手續

第一節 仲買人タルヲ得ヘキ者ハ丁年ニシテ會所々在ノ地ニ於テ滿一年以上米商營業ヲ爲シタル者ニ限ル而シテ仲買人トナラント欲スル者ハ身元金千圓以上ヲ出シ株主二名以上ノ保證ヲ以テ肝煎ニ申出テ其承認ヲ得タル上地方廳ヲ經由シテ仲買人トナラントスル願書ヲ農商務卿ニ捧ケテ其認許ヲ受クヘシ
(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第二節 仲買人タルモノハ他人ノ依頼ヲ受ルニアラサレハ賣買取引ヲナスコトヲ得ス其實買取引ニ付會所ニ對シ自己ノ名義ヲ以テシ其實買取引上一切ノ責任ヲ負擔スヘシ但一口ノ取引ニ付賣買雙方ノ依頼ヲ受タルヲ得ス
(十五年第二十六號 布告ヲ以テ改正)

第三節 仲買人ハ五名ヲ一組トシ組合中ヨリ一名ヲ推撰シ肝煎ノ承認ヲ得テ組頭ト爲シ組合中一切ノ取締ヲ爲サシムヘシ(十三年第九號布告ヲ以テ改正)

第四節 仲買人退社セントスルキハ其旨趣ヲ書面ヲ以テ肝煎ニ申出ヘシ肝煎ハ之ヲ受ケテ十日間之ヲ會所ニ張出シ置キ會所ニ連帶シタル計算上ノ關係ナキヲ認メタル上ニテ其退社ヲ許シ身元金ヲ返付シテ證人ノ責任ヲ解クヘシ

第九條 商會所一般ノ規則

第一節 外國人ヲ株主并仲買人ト爲スコトヲ得ス(十五年第廿六號布告ヲ以テ改正)

第二節 會所ニ於テ賣買取引ヲ爲スモノハ其會所ノ仲買人ニ限ルヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ改正)

第三節 會所ニ於テハ貸附金ヲナスヘカラス又仲買人ノ身元金及證據金ヲ使用スヘカラス(十五年第廿六號布告ヲ以テ追加)

第四節 會所ハ此條例ノ旨趣ニ基キ賣買主雙方ノ約定ヲ履行セシム

ルノ責任アルモノトス(十五年第廿六號布告ヲ以テ追加)

第五節 會所ハ左ノ場合ニ於テハ賣買ノ違約人トシテ會所限處分スルヲ得(十五年第廿六號布告ヲ以テ追加)

第一 賣買主雙方若クハ一方其會所ニ差入ヘキ證據金ノ差入方ヲ怠リタルトキ

第二 賣買主雙方若クハ一方其取引約定ノ期日ニ至リ其約定ヲ執行セサルトキ

第三 會所ニ於テ定メタル現米検査ノ方法及受渡上ノ期約ニ背キタルトキ

第六節 會所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ會所ノ取引上ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トヲ其者ノ證據金及身元金ヲ以テ償ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ仍ホ其損失ヲ償フコト能ハサルトキハ會所ニ於テ其責ニ任スヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ追加)

第十條 賣買取引ノ手續

第一節 會所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現米直取引ト定期トノ二様ニ分ケ又其定期ヲ二種ト爲シ其一ヲ約定ノ期限ニ至リ現米金ノ受渡ヲ爲スモノトシ其二ヲ豫定ノ期限内ニ其取引ヲ完結シ又ハ解約スルモノトス(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第二節 現米直取引ハ見本米ヲ以テ會所内ニ於テ賣買ヲ爲シ其現石受渡ノ順序ハ會所ノ規則ニ從フヘシ(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第三節 定期賣買ヲ約定シタルキハ會所ノ役員ニ届出テ賣買主雙方ヨリ約定ノ證據金ヲ會所ニ差入ルヘシ此證據金ハ少クトモ約定代金高十分ノ一ヨリ下ルヘカラス又此證據金ノ外ニ時々相場ノ高低ニ因テハ追證據金或ハ期日前ニ至リ猶ホ其約定ヲ確固ナラシムル爲メ增證據金ヲ差入シムヘシ(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正 十五年第六十六號 布告ヲ以テ約定代金十分ノ二ヲ十分ノ一ト改ム)

第四節 定期賣買約定ノ期限ハ三ヶ月ヨリ永カルヘカラス而シテ其期日ニ至レハ會所ノ役員立會ノ上必ス現米金ノ受渡シヲ爲シ其取

引ヲ完結スヘシ但約定濟ノ分ヲ雙方ノ都合ニヨリ其期限内ニ買戻シ又ハ買受ゲタル分ヲ他人へ賣渡スヲ得(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第十一條 手数料并ニ口錢ノ制限

第一節 會所ニ於テ賣買雙方ヨリ領收スヘキ手数料直取引ハ賣買金高ノ二千分ノ一ヨリ多カラス又定期取引ハ千分ノ二ヨリ多カラサルヘシ(十三年第十九號 布告ヲ以テ改正)

第二節 仲買口錢ハ其頼人トノ示談ニ任スト雖モ其制限ハ前節手数料ノ高ニ超ユヘカラス(十二年第四號 布告ヲ以テ任スト 雖モ其制限ハ云々ト改ム)

第三節 手数料口錢ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關スル他ノ債主ニ先ツテ之ヲ收受スルヲ得

第十二條 會議ノ規則

第一節 會所ノ會議ヲ分ツテ肝煎會議ト株主總集會トノ二類トス
第二節 肝煎會議ハ毎月何回ト定メ頭取ヲ以テ議長ト爲ス此會議ニ於テ發言ノ權ハ一人ニ付一説ト定メ衆說ヲ取リテ其議事ノ可否ヲ

決ス若シ可否ノ數相半ハスルハ議長ノ判決ニ任カス

第三節 右會議ニ當リ出席定員ノ半ハニ充タサルハ其議事ヲ始ムヘカラス但急遽ノ事件ハ格別ナリトス

第四節 株主ノ總集會ハ毎年一度又ハ數度例日ヲ定メテ之ヲ開ク此集會ハ頭取肝煎ノ撰舉及ヒ會所營業ノ實況計算ノ得失ヲ議スルヲ主務トス

第五節 株主五分ノ一以上ノ請求又ハ肝煎ノ衆議ニ依リテハ臨時總集會ヲ開クヲ得

第六節 總集會ニ於テノ發言ノ權利決議ノ方法ハ便宜ニ從テ之ヲ定ムヘシ

第七節 總集會ニ於テノ議長ハ頭取又ハ株主中ヨリ撰舉スルモ妨ケナシ

第十三條 資本金増減ノ手續

第一節 會所ニ於テ資本金高ヲ増減セントスル時ハ總集會ノ決議案

ヲ具シ頭取肝煎其次第ヲ詳記シ農商務卿ノ指揮ヲ受クヘシ

但其資本金賣買取引ノ景況ニ對シ不適當ト認ルトキハ農商務卿

ハ其適當ノ金額ニ増加スヘキ旨ヲ命スルヲアルヘシ(十五年第廿六號布告ヲ

以テ但書追加)

第二節 右増減ノ許可ヲ得タル上ハ直チニ世上ニ公告シ其増減セシ

名前書ヲ取纏メタル上農商務卿ニ届出且地方管廳或ハ銀行ニ預ケタル營業保證ノ金額ヲ増減スヘシ

第十四條 損益金計算ノ定規

第一節 頭取肝煎ハ毎年兩度以上營業ノ總決算ヲ爲シ其内税金并ニ積立金其他一切ノ社費ヲ引去リ残り損益高ヲ以テ株數ニ割り合セ之ヲ株主ニ分賦スヘシ

第二節 右計算表ハ株主ニ分賦ノ日ヨリ十五日内農商務卿ニ届出且世上ニ公告スヘシ

第十五條 納税ノ手續及ヒ積金ノ規則

第一節 會所ハ會所ニ於テ領收セシ賣買手數料總金高十分ノ二ヲ稅納スヘシ而シテ其税金前半年分ハ七月中後半年分ハ翌年一月中之ヲ地方廳へ上納スヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ改正同年第六十二號布告ヲ以テ十分ノ四トアルヲ十分ノ二ト改)

第二節 株主等へ配當スヘキ純益金一ケ年一割即百分ノ十以上ノ利息ニ當ルモハ肝煎ノ衆議ヲ以テ割賦高ノ内幾分ヲ引去リ之ヲ積立テ以テ非常準備金ト爲スヘシ

第十六條 報告ノ定規

第一節 會所及仲買人ハ毎日取扱ノ事項并金穀出納等凡テ之ヲ詳明正確ニ記載シ且其簿記ノ方法ニ於テハ農商務卿ノ差圖アルトキハ其差圖ニ從フヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ改正)

第二節 會所及仲買人ニ於テ使用スル所ノ諸帳簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ農商務卿ニ届出ヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ追加)

第三節 會所ハ賣買實際ノ景況及金穀出納其他役員ノ進退并株主ノ

異同仲買人ノ退社ヲ農商務卿ニ報告スヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ追加)

第十七條 官員檢査規則

第一節 地方長官ハ時々官員ヲ派出シ會所及仲買人營業ノ摸樣其他諸帳簿并現米ノ所在其受渡ノ實況及會所ノ現金等ヲ查覈セシムヘシ又時トシテハ農商務省ヨリ官員ヲ派出シ之ヲ檢査セシムルコトアルヘシ若シ右檢査官員ヨリ疑問等アルトキハ會所ノ役員及仲買人等ハ逐一答辯ヲ爲サル可ラス(十五年第廿六號布告ヲ以テ改正)

第十八條 諸願届其他ノ書類上達ノ定規

第一節 會所ヨリ農商務卿ニ差出スヘキ文書中諸願ハ一通其他ハ一通宛ニシテ其差出方ハ地方廳ヲ經由スヘシ(十五年第廿六號布告ヲ以テ改正)

第十九條 罰則

第一節 會所ノ役員及株主仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タル者株主仲買人ノ條例ニ背犯シタルヲ不問ニ措キ又ハ背犯セシメタル實證アルモハ役員并ニ本人共其輕重ニヨリ三十圓以上千圓以下ノ

十四年第七十二號布告罰
例處斷方參看第十四類ニ
載ス

罰金ニ處ス(十三年第十九號
布告ヲ以テ改正)

第二節 (十三年第十九號布告ヲ以テ追加)
十六年第三十號布告ヲ以テ削除)

第三節 官員検査ノ節簿冊書類ヲ差出スヲ拒ミ又ハ疑問ニ答辨ヲ

爲サ、ル者アルハ頭取又ハ其主任者へ五十圓以下ノ罰金ヲ科ス

ヘシ(十三年第十九號布告ヲ以テ元二
節ヲ三節ニ元三節ヲ四節ト爲ス)

第四節 會所ノ規約ニ背犯シタル役員株主仲買人ヲ會所限り處分ス

ルハ之ヲ除名スルカ或ハ過怠料ヲ取立ルニ止ルモノトス但其過怠

料ハ株金身元金ノ高二超ルヲ得ス(十五年第二十六號
布告ヲ以テ改正)

第二十條 (十五年第二十六號布告ヲ以テ追加)
同年第四十六號布告ヲ以テ削除)

右ノ通制定候事

○米商會所及株式取引所ノ賣買上ニ付處分明治十五年八月
第四十六號布告

米商會所及株式取引所ノ賣買ニ不正惡弊アルカ又ハ賣買取引
上ノ景況穩當ナラサル爲メ公共ニ妨害ヲ及ホスト認ムルトキハ

農商務卿ハ其會所及株式取引所又ハ仲買人ノ營業ノ一部又ハ全部
ヲ停止若クハ禁止シ又ハ役員ヲ退罷セシムルコトアルヘシ

但本年第二十六號布告米商會所條例追加第三十條ハ削除ス

○米穀金銀等竊ニ賣買取引ヲ爲ス者處分明治十三年四月
第二十一號布告

法律定規ニ遵ヒ官許ヲ得タル米商會所株式及ヒ橫濱取引所外若

クハ内タリ竊ニ米穀并金銀貨幣及株式ノ限月若クハ現場定期
起リタル現

場ヲ云フ賣買其他之ニ類似シタル取引ヲ爲シタル者及情ヲ知

テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタ

ル者ハ拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ無効ト爲

スヘシ

但本條ヲ犯シタル者ヲ告發シタル者ニハ其告發ニ因テ科シタ

ル罰金ノ全部ヲ給ス其自ラ犯シタル者事未タ發覺セサル前ニ

於テ自首シタルハ其罪ヲ問ハス

右布告候事

○米商會所株式取引所ノ方法ニ倣ヒ物品ノ取引ヲ爲ス者處分明治十六年一月第四號布告

米商會所株式取引所ノ限月若クハ現場賣買ノ方法ニ倣ヒ又ハ之ニ類似ノ方法ヲ用ヒ諸物品ノ賣買取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ總テ明治十三年四月第貳拾壹號布告ニ據リ處分スヘシ

○米商會所及株式取引所ノ仲買人竊ニ米穀等ノ賣買ヲ爲ス者處分明治十六年八月第二十九號布告

米商會所及株式取引所ノ仲買人ニシテ竊ニ米穀並金銀貨幣公債證書株式ノ限月若クハ現場定期ヨリ起リテ賣買又ハ其類似ノ取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ五拾圓以上千圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ米商會所條例及株式取引所條例ノ手續ヲ爲サシム

○米穀限月并現場取引ハ米商會所内ニ限ル大正三年甲第三十二號布告

米穀限月賣買ノ儀ハ明治九年第五百五號公布ノ趣有之該條例ニ遵ヒ會所ヲ設ク營業候儀ハ其處ニ依リ許可相成候處右限月并ニ現場現月賣買ヨリ起賣買取引ハ米商會所内ニ限リ差許サレ候儀ニテ會所ノ支社出張所ヲ取設ク又ハ仲買人ノ分店代理人取次人等ヲ置候儀不相成ハ勿論渾テ會所外ニ於テハ仲買人ヲリ其業務取扱候儀一切不相成筋ニ候條必得違無之樣可致此旨布達候事(三)

○米商會所株式取引所ノ仲買人認許料納付方第十六年八月號布告
米商會所及株式取引所ノ仲買人ト爲ラント欲スル者農商務卿ノ認許ヲ得タルトキハ認許料トシテ金三拾圓ヲ農商務省ニ納ムヘシ

○各米商會所株式取引所仲買人員定限農商務省第十七號告示
米商會所株式取引所仲買人員之儀米商會所ハ東京百名大坂七十五名其他ハ一箇所三十名株式取引所ハ東京横濱ハ一箇所七十名大坂神戸ハ一箇所六十名ヲ以定限トシ其餘ハ自今不及認許候條此旨告示候事(十七年農商務省第九號告示)

○株式取引所條例 明治十一年五月 第八號布告

沿革略記 明治七年十月第七號布告ヲ以テ株式取引條例ヲ制定ス○十一年五月第八號布告ヲ以テ前條例ヲ廢シ更ニ株式取引所條例ヲ制定ス是レ現行法ナリ

十三年第廿一號布告十六
年第四號布告米穀其他物
品ヲ米商會所株式取引所
ノ方法ニ依ヒ米穀其他物
類ニ載ス者處分方參看本
類ニ載ス

明治七年十月第七號布告株式取引條例相廢シ更ニ別冊ノ通相定候條
此旨布告候事

(別冊)

株式取引所條例

第一章 株式取引所創立及開業ノ事

第一條 株式取引所ハ株式仲買人ノ集會シテ日本政府ノ諸公債證書
及日本政府ノ條例ヲ遵奉シテ發行シタル銀行并諸會社ノ株券等ヲ
賣買取引スル所ナリ而シテ之ヲ創立セントスルモノハ其創立願書
ハ其地方長官ノ奧書ヲ受ケ之ヲ農商務省ヘ差出シ農商務卿ノ允許
ヲ請フヘシ(十四年第四十三號布告ヲ以テ本條例中大藏省トアルハ農商務省トアルト改ム以下倣之)

第二條 此條例ヲ遵奉シテ株式取引所ヲ創立スルニハ其發起人少ク
トモ拾名以上ニシテ其資本金額ハ拾萬圓以上タルヘシ而シテ其資

本金總高ノ半數以上ニ當ル金額ヲ右發起人總員ニテ出スヘシ(十三年
五十七號布告ヲ以テ資
本金額拾萬圓ニ改ム)

第三條 農商務卿ハ此創立願書ヲ受領シテ其許可スヘキヤ否ヲ考案
シ或ハ之ヲ許可シ或ハ之ヲ許可セサルコトアルヘシ

第四條 發起人右創立許可ヲ受クルニ於テハ諸般ノ規定ヲ議定シテ
創立證書及定款申合規則各二通ヲ製シ株主一同記名調印ノ上地方
長官ノ奧書證印ヲ受ケ之ヲ農商務省ヘ差出スヘシ

但創立證書及定款等ハ創立許可ヲ得タル日ヨリ遅クトモ三ヶ月
間ニ差出スヘシ若シ右期限内ニ差出サ、ルキハ其許可ハ無効ニ
屬スヘシ

第五條 右創立證書及定款申合規則ハ左ノ主旨ニ從ヒ各取引所ノ便
宜ニ依テ之ヲ制定スヘシ然レモ必ス此條例ノ旨趣ニ抵觸スルヲ得

光ルルシニ... 創立證書ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同決定シタル綱領ノ條件及ヒ其責任ノ有限或ハ無限ヲ該取引所ノ株券限リ或ハ其株券ノ二倍等其限アルヲ云ヒ無限責任トハ株主一ツ明記シ必ス之ヲ遵守踐行スヘキ旨ヲ政府ニ對シ保證スルモノナリ

定款ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同其取引所ノ便宜ヲ商量決定シテ互相確守スヘキ約束條款ヲ記載スルモノナリ
申合規則ハ賣買取引ニ付賣買主雙方ノ間ニ於テ取引所ニ對シ確守スヘキ規程ヲ記載スルモノナリ

第六條 農商務卿ハ右創立證書及定款申合規則ヲ檢按シテ不都合ナシト思考スルニ於テハ之ニ奥書證印ヲ加ヘ免狀ト共ニ之ヲ其取引所ニ下付シテ開業ヲ許スヘシ
但爾後取引所ノ都合ニヨリ其創立證書及定款申合規則ヲ改正加除セシトスルニキ其時々農商務卿ノ認許ヲ受クヘシ

第七條 取引所ハ開業前ニ於テ其營業保證ノ爲メ資本金高ク二分二以上ニ當ル現金又ハ公債證書(農商務省ヨリ指定)ヲ農商務省ニ差出シ預置クヘシ
但シ開業免狀ヲ得タル後滿五ヶ月ニ至リ猶ホ本文ノ手續ヲ爲サズ又ハ開業セサルヲアルトキハ其免狀ハ取消タルヘシ

第八條 取引所ハ開業少日ヨリ滿五ヶ年ノ間其營業ヲ保續スルヲ得ヘシ右滿期ニ至リ尙ホ營業セント欲スルキハ更ニ允許ヲ受クヘシ
第九條 取引所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀并ニ創立證書ノ寫ヲ添ヘ何月何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告スヘシ

第二章 株主并ニ株手形ノ事
第十條 各株主ヨリ入金シタル金額ハ分テ百圓以上一定ノ株式トナシ株手形ヲ製シ其株主タルモノヘ之ヲ交付スヘシ

第十一條 株主ハ其取引所ノ營業時間ハ何時ニテモ其金員及ヒ諸帳

簿ヲ檢閲スルヲ得ヘシ

第十二條 株主ハ何等ノ事故アルトモ其取引所解散ノ期ニ至ラサル間ハ其株金ヲ取戻スヲ得ス

第十三條 株主ハ其取引所ノ承認ヲ得タル上其所持ノ株式ヲ賣渡シ又ハ讓渡シヲナスヲ得ヘシ

第十四條 株主タルモノハ其取引所ノ役員タラサル時間ハ何時ニテモ仲買人タルヲ得ヘシト雖モ仲買人トナリタルモ仲買人ノ規則ヲ遵守スヘシ而シテ賣買上ニ於テハ之ヲ仲買人ト稱スヘシ

第三章 仲買人ノ事

第十五條 丁年ニシテ仲買人トナラント欲スル者ハ次條ニ定ムル身元金ヲ差入レ取引所ノ承認ヲ得タル上仲買人トナラントスル願書ヲ農商務卿ニ捧ケ其認許ヲ受クヘシ(十三年第二十號 布告ヲ以テ改正)

仲買人ハ他人ノ委託ヲ受ケテ賣買取引ヲ爲スト自己ノタメニ爲ストヲ問ハス取引所ニ對シテハ其賣買取引上一切ノ責任ヲ負フヘシ

十六年第十九號布告仲買人認許米穀及金銀貨幣等賣買取引ヲ爲ス者處分方參看本類ニ載ス

十六年第十八號布告仲買人認許米穀本類ニ載ス

(十三年第二十號 布告ヲ以テ追加)

第十六條 株式仲買人ノ身元金ハ貳百圓以上金銀仲買人ノ身元金ハ千圓以上タルヘシ(十三年第二十號 布告ヲ以テ改正)

第十七條 仲買人ハ丁年者ニ限ルヘシ且ツ一度身代限ノ處分ヲ受ケタル者ハ其負債ノ義務ヲ免レタル實證アルニ非サレハ入社ヲ許サ、ルヘシ

第四章 役員ノ事

第十八條 取引所ノ役員ト稱スルモノハ左ノ如シ

頭取

肝煎

其他支配人書記方計算方等ノ名義ヲ以テ役員ヲ定ムルハ取引所ノ便宜ニ任ス

第十九條 取引所ノ肝煎ハ五名以上トシ株主ノ總會ニ於テ取引所ノ定規ニ從ヒ現ニ三十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ撰舉シ肝煎

十六年農商務省第七號告示仲買人ノ定ム參看本類ニ載ス

ハ其同僚中ヨリ頭取壹人ヲ推舉シ其住所姓名年齢等ヲ農商務卿ニ具申シテ其認許ヲ受クヘシ農商務卿ハ時上シテハ其改撰ヲ命スルコアルヘシ(十三年第二十號 布告ヲ以テ改正)

支配人以下ノ役員ハ頭取肝煎ノ衆議ニ依リ株主又ハ株主ニアラサル者ヲ撰任スルコトヲ得(十三年第二十號 布告ヲ以テ追加)

第二十條 取引所役員ノ在職年限ハ一ケ年タルヘシ

第二十一條 頭取ハ取引所ノ事務ヲ總轄シ取引所一切ノ責ニ任スヘシ

第二十二條 頭取肝煎ハ其仲買人賣買上ノ差違レヲ解キ違約者ヲ處分スルノ責任アリトス

第二十三條 取引所諸役員職務上ノ責任權限等ハ其取引所ニ於テ適當ノ規程ヲ設ケ之ヲ定款中ニ記載スヘシ

第五章 一般ノ規程

第二十四條 外國人ヲ取引所ノ株主并仲買人ト爲スコトヲ得ス

第二十五條 取引所ニ於テ株式賣買取引ヲナス者ハ其取引所ノ承認ヲ經タル仲買人ニ限ルヘシ

第二十六條 (本條ハ十四年第十八號 布告ヲ以テ刪除)

第二十七條 取引所ノ役員タルモノハ其取引所ニ於テ賣買本人又ハ仲買人トナルヘカラス

第二十八條 取引所ノ役員及ヒ仲買人ハ他ノ株式取引ヲ爲ス會社ノ役員又ハ仲買人或ハ他ノ銀行并ニ諸會社(官許ヲ經タル合本會社)ノ役員タルヲ得ス

第二十九條 取引所ハ其營業ノ爲メ緊要ナル地所家屋ヲ除クノ外地所家屋ヲ所持スルヲ許サズ又之ヲ賣買スヘカラス

第三十條 政府ニ於テ賣買ヲ許シタル諸公債證書及ヒ政府ノ條例ヲ遵奉シテ發行シタル銀行并諸會社ノ株券等ノ賣買ヲ除クノ外此取引所ニ於テ一切他ノ物件ヲ賣買シ他ノ事業ヲ營ムヘカラス

但本條ニ掲載セザル諸會社ノ株券ト雖モ其營業確實ナリト認ム

此等ハ農商務卿ニ於テ其實買ヲ許可スルヲ得(十三年第五十七號布告ヲ以テ但書追加)

第三十一條 取引所ハ第一章第七條ニ掲ケタル營業保證ノ爲メ農商務省ヘ預クヘキ公債證書ヲ除クノ外自ラ諸公債證書諸株券等ヲ賣買シ又ハ之ヲ所持スヘカラス

第三十二條 取引所ハ諸證據金ヲ使用スヘカラス又貸附金ヲナスヘカラス

第三十三條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ取引所ノ取引上ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トヲ其者ノ證據金及ヒ身元金ヲ以テ償ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ尙ホ其損失ヲ償フコト能ハサルトキハ取引所ニ於テ其責ニ任スヘシ(十五年六十四號布告ヲ以テ改正)

第三十四條 取引所ハ其取引所ニ於テ株式等ノ賣買ヲ認許シタル銀行并諸會社及ヒ新立會社ヲ株式ヲ賣買スルコトノ依頼ヲ受ルト雖モ

其事情ニヨリ之ヲ停止シ又ハ之ヲ許否スルノ權ヲ有ス

第三十五條 取引所ノ諸願伺届又ハ諸證據約定書及往復ノ文書等取引所一般ニ關スル事件ハ頭取肝煎等コレニ記名調印スヘキハ勿論ナレモ必ス其取引所ノ名ヲ署シ取引所ノ印ヲ捺スヘシ

第六章 賣買取引ノ事

第三十六條 取引所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現場ト定規ノ一様ニ分チ必ス現物ノ受渡ヲ爲スヘシ

但三ヶ月ヨリ永キ定期ノ約定ヲナスヘカラス

第三十七條 凡取引所ニ於テ賣買ノ約定ヲナシ其定期ニ係ルモノハ約定金高百分ノ五宛ニ下ラサル證據金ヲ賣買雙方ヨリ差入ル可シ而シテ其期限中相庭ノ高低等ニヨリテハ追證據金増證據金等ヲ差入シムルヲ得ヘシ

第三十八條 約定取引ノ期限ニ至ツテハ其品種ニ依リ記名書替等其
他受渡シノ手續ハ政府又ハ諸會社ノ成規ニ照シ之ヲ履行スヘシ

第三十九條 約定期限内ニ於テ之ヲ轉賣スルヲ得ヘシト雖モ其期日ニ至レハ必ス現物ノ受渡ヲ爲スヘシ

第四十條 賣買主ニ於テ諸證據金ノ差入レヲ怠リ又ハ期限ニ至リテ其約定ヲ履行セサル者ハ都テ之ヲ違約人ト爲スヘシ(十五年第六十號布告ヲ以テ改)

第七章 手数料ノ事

第四十一條 取引所ニ於テ收領スヘキ手数料ハ(賣買雙方ヨリ)其賣買金高現場取引ハ千分ノ一定期取引ハ千分ノ二宛ニ超ユヘカラス

第四十二條 手数料ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關係スル他ノ債主ニ先ツテ之ヲ收受スルヲ得ヘシ

第八章 検査ノ事

第四十三條 農商務卿ニ於テ要用ト思考スルモハ何時ニテモ官員ヲ派遣シ或ハ其地方長官ヘ達シテ其取引所ノ業体及ヒ金銀其他諸帳簿等ヲ検査セシムルヲアルヘシ

第九章 帳簿ノ事

第四十四條 取引所ハ毎日取扱ノ事項ハ勿論金銀ノ出納等凡テ之ヲ詳明正確ニ記載シ且ツ其簿記ノ方法ニ於テ農商務卿ノ差圖アルトキハ其差圖ニ從フヘシ

第四十五條 取引所ニ於テ製定使用スル處ノ諸帳簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ農商務省ヘ届出ヘシ

第十章 諸報告ノ事

第四十六條 取引所ハ賣買實際ノ報告及金銀出納表其他役員ノ進退并株主仲買人ノ姓名等農商務卿ノ指命スル所ニ從ヒ時々報告ヲナスヘシ

第十一章 納税ノ事

第四十七條 此取引所ハ追テ政府ニ於テ制定施行スル所ノ收税規則ニ遵ヒ相當ノ税金ヲ納ムヘシ

第十二章 罰則

株式取引所條例

第四十八條 取引所ノ役員及株主并仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タルモノ株主并仲買人ノ此條例ニ背戾シタルヲ不問ニ措キ又ハ背戾セシメタル實證アルキハ役員并ニ本人トモ其事ノ輕重ニ依リ三拾圓ヨリ少カラズ千圓ヨリ多カラサル罰金ヲ科スヘシ

第四十九條 官員檢査ノ節取引所役員及ヒ仲買人等簿冊書類ヲ差出スコトヲ拒ミ又ハ疑問ニ答辯ヲ爲サ、ル者アルトキハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ(十五年第六十四號 布告ヲ以テ改正)

第五十條 取引所ノ規約ニ背犯シタル役員及ヒ株主仲買人ヲ取引所限リ處分スルハ之ヲ除名スルカ或ハ過怠料ヲ取立ツルニ止ルモノトス(十五年第六十四號 布告ヲ以テ但書共追加)
但其過怠料ハ株金身元金ノ高ニ超ユルヲ得ス

○株式取引所稅額明治十一年九月 第三十號 布告
本年五月第八號布告株式取引所條例第十一章ニ掲載スル稅額ノ儀

ハ賣買手數料總金高十分ノ一ト相定メ本年七月ヨリ徵收候條此旨布告候事(十五年第六十七號 布告ヲ以テ手數料其他現收セル總金高十分ノ一トアルヲ賣買手數料總金高十分ノ一ト改)

但納期ハ一ヶ年兩度ニ區分シ前半年分ハ七月三十一日限リ後半年分ハ一月三十一日限リ其管轄廳ヘ可相納事
○洋銀取引所設立願方明治十二年二月 第八號 布告

從來神奈川縣下橫濱港ニ於テ洋銀相場取引致シ候者有之候處右ハ一切禁止候條自今洋銀取引所設立營業致シ度者ハ昨十一年五月第八號布告株式取引所條例ニ照準シ大藏卿ヘ可願出此旨布告候事

但(十三年第二十號 布告ヲ以テ但書ヲ廢シ金銀賣買)買取引ノ證據金モ株式取引所條例ニ遵ハシム
○橫濱取引所ニ於テ金銀貨幣ノ取引ヲ許ス明治十二年九月 第三十八號 布告
本年二月第八號布告ニ據リ設立シタル橫濱洋銀取引所ノ儀自今橫濱取引所下改稱シ當分ノ内金銀貨幣取引差許候條此旨布告候事

十四年第四十三號布告ヲ以テ株式取引所管理ヲ農商務卿ニ屬ス

○橫濱取引所ノ改稱及株式賣買ヲ許ス明治十三年九月、大藏省甲第百貳號布達
株式取引所ノ儀ハ當分ノ内東京大坂ニ於テ一ヶ所宛ニ相限リ候旨明治十一年五月甲第拾四號ヲ以及布達置候處詮議ノ次第有之
橫濱取引所ノ儀自今橫濱株式取引所ト改稱シ從來營業ノ外株式賣買差許候條爲心得此旨布達候事

○株式取引所ニ於テ金銀貨幣ノ取引ヲ許ス明治十二年九月、第三十七號布告

東京并大坂株式取引所ニ於テ當分ノ内金銀貨幣取引差許候條此旨布告候事

○神戸株式取引所ニ於テ金銀貨幣ノ取引ヲ許ス明治十六年七月、第二十五號布達
神戸株式取引所ニ於テ當分ノ内金銀貨幣取引ヲ差許ス

○株式取引所ニ於テ金銀貨幣定期取引ヲ許ス明治十六年八月、第二十七號布告

東京大坂橫濱神戸株式取引所ニ於テ金銀貨幣取引ノ儀當分ノ内二ヶ月以内ノ定期取引差許ス但其取引ニ係ル規程ハ農商務卿ノ認許ヲ受ク可シ

○

○米商會所株式取引所仲買人納稅規則明治十五年十二月、第六十五號布告

米商會所并株式取引所仲買人納稅規則左ノ通制定シ來十六年四月一日ヨリ施行ス

米商會所株式取引所仲買人納稅規則

第一條 米商會所仲買人定期賣買ヲ爲ストキハ賣買雙方ヨリ各約定代金高千分ノ五ヲ納稅スヘシ

第二條 株式取引所株式仲買人公債證書并諸株式ノ定期賣買ヲ爲ストキハ賣買雙方ヨリ各約定代金高千分ノ一ヲ納稅スヘシ

第三條 第一條第二條ノ場合ニ於テ定期内ニ轉賣又ハ買戻ヲ爲ス者ハ其轉賣又ハ買戻ニ係ル稅ヲ免除ス

第四條 株式取引所金銀貨仲買人金銀貨ノ取引ヲ爲ストキハ賣買雙

方ヨリ各其取引代金高千分ノ二半ヲ納税スヘシ

但定期取引約定中轉賣又ハ買戻ニ係ルモノハ第三條ニ據ル(十六年第二十八號布告ヲ以テ但書追加)

第五條 賣買ヲ解約スルコトアルモ其税金ハ之ヲ還付セス

第六條 税金ハ會所又ハ取引所ニ納ムヘシ

第七條 會所及取引所ハ仲買人ヨリ納メタル税金ヲ每一箇月取纏メ翌月十日限り地方廳ニ上納スヘシ

第八條 税金徴收ノ方法ハ大藏卿ノ達ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第九條 大藏卿ハ地方廳ニ委任シ又ハ隨時官吏ヲ派出シ納税ノ精算ヲ検査セシムヘシ

第十條 税金ヲ納メスシテ賣買取引スル者ハ脱税高三倍ノ罰金ニ處ス但此場合ニ於テハ仲買人タルノ認許ハ其効ヲ失フモノトス

第十一條 前條ノ罰金ハ仲買人ノ身元金ニ對シテ第一先取ノ特權ヲ有スヘシ

十五年第四十六號布告米商會所及株式取引所ノ資類ニ載ス

第十二條 會所及取引所ニ於テ本則納税ノ取締ヲ怠ルトキハ米商會所條例第十九條第一節株式取引所條例第四十八條及本年第四十六號布告ニ依リ處分シ仍ホ其資本金ヲ以テ納税ノ缺額ヲ追徴スヘシ

○爲替手形約束手形條例明治十五年十二月五十七號布告
爲替手形約束手形條例別冊ノ通制定ス

(別冊)

爲替手形約束手形條例

第一章 爲替手形

第一節 爲替手形ノ性質及ヒ法式

第一條 爲替手形ハ振出人ヨリ支拂人ニ當テ記載ノ金額ヲ受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ拂渡サシムル證券ヲ謂フ

爲替手形約束手形條例

第二條 爲替手形ニハ左ノ件々ヲ記載シ振出人記名調印ス可シ

一 金額

二 振出ノ年月日及ヒ場所

三 支拂ノ期限及ヒ場所

四 支拂人ノ氏名

五 受取人ノ氏名

六 受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ支拂フ可キ旨

第三條 爲替手形ハ一ノ爲替ニ付キ同文ノ手形ニ通又ハ三通ヲ振出

スヲ得此場合ニ於テハ各通ニ番號ヲ附シ内一通ニ對シ支拂ヲ爲

シタル時ハ他ノ各通ハ無効タル可キヲ記載ス可シ

第四條 爲替手形ノ金額ハ五圓以上ニ限ル者トス

第二節 支拂期限

第五條 爲替手形ノ支拂期限ハ左ノ如ク區別ス

一 一覽拂

二 定期拂

三 一覽後定期拂

第六條 一覽拂ノ手形ハ其呈示ヲ受ケタル時直ニ支拂フ可キ者トス

第七條 定期拂ノ手形ハ手形ニ定メタル期日ニ支拂フ可キ者トス

第八條 一覽後定期拂ノ手形ハ一覽濟ノ日ヨリ其日數ヲ起算シ手形

ニ定メタル期日ニ支拂フ可キ者トス

第九條 一覽拂ノ手形及ヒ一覽後定期拂ノ手形ハ振出ノ日附ヨリ三

ヶ月以内ニ之ヲ呈示ス可シ

第十條 定期拂ノ期限ハ振出ノ日附ヨリ一覽後定期拂ノ期限ハ一覽

濟ノ日ヨリ六ヶ月以内ト爲ス

第三節 爲替資金

第十一條 振出人ハ支拂人ニ對シ爲替資金ヲ交付スルノ義務アル者

トス

第十二條 振出人ヨリ支拂人ニ對シ貸方計算アル時ハ之ヲ以テ爲替

資金ニ供用スルヲ得

第四節 裏書

第十三條 爲替手形ハ裏書ヲ以テ其所有權ヲ移轉スルヲ得

第十四條 裏書ニハ買受人又ハ讓受人ノ氏名及ヒ年月日ヲ記載シ賣

渡人又ハ讓渡人氏名住所ヲ記シ調印ス可シ

第十五條 裏書人ハ振出人及ヒ自己以前ノ裏書人ト共ニ自己以後ノ

裏書人及ヒ手形所持人ニ對シ相連帶シテ償還ノ責任ヲ負フ者トス

第十六條 手形ノ裏面ニ餘白ナキ時ハ補箋ヲ爲シ裏書ヲ爲スヲ得

第五節 保證

第十七條 振出人裏書人及ヒ支拂人ハ他人ヲシテ手形ノ支拂ヲ保證

セシムルヲ得

保證人ハ其保證ノ旨ヲ手形又ハ別紙ニ記載ス可シ

第十八條 振出人裏書人ノ保證人ハ本人義務ヲ缺タル場合ニ於テ本

人ニ代リ他ノ義務者ト相連帶シテ償還ノ責任ヲ負フ者トス

第十九條 保證人支拂ヲ爲シタル時ハ本人ニ代リ其權利ヲ有スル者

トス

第六節 引受

第二十條 定期拂手形及ヒ一覽後定期拂手形ノ所持人ハ支拂人ニ其

引受ヲ求ムルヲ得

第二十一條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ其旨及ヒ年月日ヲ

手形ニ記載シ記名調印ス可シ

第二十二條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケタル時ハ振出人身代限ノ處

分ヲ受ケタル場合ト雖モ其取消ヲ爲スヲ得ス

第二十三條 支拂人手形ノ支拂ヲ引受ケサル時ハ所持人ハ引受ノ拒

ミ證書ヲ受ク可シ

第二十四條 所持人拒ミ證書ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ電信書留郵便其

他證據トナル可キ手續ヲ以テ振出人又ハ裏書人ニ通知シテ爲替金

額及ヒ諸費用ニ相當スル抵當又ハ保證人ヲ以テ保證ヲ立テシムル

ヲ得
通知ヲ受ケタル裏書人ハ振出人又ハ自己以前ノ裏書人ニ對シ所持人同一ノ處置ヲ爲スヲ得

第二十五條 振出人又ハ裏書人ノ内既ニ相當ノ保證ヲ立タル者アル時ハ其以後ノ裏書人ハ保證ヲ立ルノ義務ヲ免ル、者トス

第七節 支拂

第二十六條 手形ニ貨幣ノ種類ヲ記シタル時ハ其貨幣ヲ以テ支拂フ可シ

第二十七條 手形所持人ハ支拂期限ニ於テ其支拂ヲ請求ス可シ若シ定式ノ祝日祭日或ハ慣習ノ休業日ニ當ル時ハ其翌日之ヲ請求ス可シ

第二十八條 手形所持人支拂金ヲ請取ル時ハ手形ニ領收ノ旨ヲ記載シ記名調印シテ金額ト引換ヘ支拂人ニ交付ス可シ

第二十九條 一ノ爲替ニ付キ手形數通アル時ハ支拂人ハ其引受ヲ記

載シタル手形ニ對シ支拂ヲ爲ス可シ

第三十條 支拂人期限ニ至リ手形ノ支拂ヲ爲サル時ハ手形所持人ハ支拂ノ拒ミ證書ヲ受ク可シ

第三十一條 支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケタル者ハ其旨ヲ電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ振出人及ヒ各裏書人ニ通知ス可シ

第八節 拒ミ證書

第三十二條 支拂人手形ノ引受又ハ支拂ヲ拒ム時ハ手形ニ附箋ヲ爲シ其旨及ヒ年月日ヲ記載シ記名調印ス可シ之ヲ拒ミ證書ト爲ス

第三十三條 支拂人拒ミ證書ヲ作ルヲ肯セス又ハ其住所分明ナラス又ハ不在ニテ代理人ナキ時ハ所持人自ラ其始末ヲ記シ記名調印シテ郡區役所若クハ戸長役場ノ證印ヲ受ケ拒ミ證書ニ代用ス可シ

第三十四條 支拂人身代限ノ處分ヲ受ケタル場合ニ於テハ支拂期限前ト雖モ手形所持人ハ拒ミ證書ヲ受クルヲ得

第九節 償還ノ要求

第三十五條 手形所持人支拂ノ拒ミ證書ヲ受ケタル時ハ其日附ヨリ十五日以内ニ振出人裏書人ノ中一人若クハ數人ニ對シ爲替手形ノ金額期限後ノ利子及ヒ拒ミ證書并ニ通知ノ費用ノ償還ヲ要求スルヲ得

第三十六條 第三十五條ノ要求ニ對シ償還ヲ爲シタル裏書人ハ其日ヨリ十五日以内ニ自己以前ノ裏書人又ハ振出人ノ中一人若クハ數人ニ對シ自己ノ償還シタル金額及ヒ其利子ヲ要求スルヲ得

第三十七條 振出人ハ爲替資金ヲ支拂人ニ交付シタルノ故ヲ以テ償還ノ要求ヲ拒ムヲ得ス

第三十八條 要求ヲ受ケタル者ハ拒ミ證書ヲ附シタル爲替手形及ヒ證據ヲ添ヘタル計算書ト引換ヘニ非レハ償還ヲ爲スニ及ハス

第三十九條 第九條ノ呈示期限第二十七條ノ支拂請求期限及ヒ第三十五條第三十六條ノ要求期限ヲ怠リタル者ハ裏書人及ヒ爲替資金ヲ交付シタル振出人ニ對シ要求ノ權利ヲ失フ者トス但引受ヲ爲シ

若クハ爲替資金ヲ受ケタル支拂人又ハ資金ヲ交付セサル振出人ニ對シ第九條第二十七條ノ期限ニ係ル者ハ振出ノ日附ヨリ起算シ第三十五條第三十六條ノ期限ニ係ル者ハ拒ミ證書ノ日附ヨリ起算シテ三ヶ年間償還ヲ要求スルヲ得

第十節 紛失

第四十條 手形所持人手形ヲ紛失シタル時ハ直ニ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ其手形ノ流通ヲ止ムル旨ヲ廣告シ又電信書留郵便其他證據トナル可キ手續ヲ以テ支拂人ニ通知シ其支拂ヲ止メシム可シ

第四十一條 手形紛失人ハ振出人ニ紛失ノ旨ヲ證シ代手形ヲ請受ケ各裏書人ヲシテ再ヒ之ヲ裏書セシメ更ニ其手形ヲ流通スルヲ得但振出人ハ手形紛失人ヲシテ保證ヲ立テシムルヲ得

第四十二條 手形紛失人代手形ヲ受ケ得サル時ハ支拂期限ニ至リ支拂人ニ對シ真正ノ所持人タル旨ヲ證明シ支拂ヲ請求スルヲ得但支拂人ハ手形紛失人ヲシテ保證ヲ立テシムルヲ得

第二章 約束手形

第四十三條 約束手形ハ振出人記載ノ金額ヲ受取人又ハ其所有權ヲ受ケタル人ニ自ラ支拂フ可キ旨ヲ約束シタル證券ヲ謂フ

第四十四條 約束手形ハ定期拂ニシテ金額ハ貳拾五圓以上ニ限ル者トス

第四十五條 爲替手形ニ付キ定メタル規則ハ第三節第六節其他約束手形ノ性質ニ反スル條目ヲ除クノ外之ヲ約束手形ニ適用ス可シ

第三章 通則

第四十六條 第三十五條第三十六條ノ要求期限ハ路程ニ要スル日數八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フルモノトス

第三十五條第三十六條ノ要求期限及ヒ第九條呈示ノ期限外國ト關係スルモノハ其路程ニ要スル相當日數ノ猶豫ヲ與フルモノトス

第四十七條 第一節第四節及ヒ第四十三條第四十四條ノ規程ニ合セサル手形ハ裏書ヲ以テ所有權ヲ移轉スルコトヲ得ス

○商標條例 明治十七年六月十九號布告

商標條例別冊ノ通制定シ明治十七年十月一日ヨリ施行ス

(別冊)

商標條例

第一條 商標ハ農商務省ノ商標簿ニ登録ヲ經タルトキハ其所有主ニ於テ登録ノ日ヨリ十五年間之ヲ專用スルノ權ヲ有ス可シ

第二條 商標ヲ專用セント欲スル者ハ願書ニ見本并明細書ヲ添ヘ登録ヲ願出ツ可シ其明細書ニハ商標ノ説明、用方并其商品ノ名目種類ヲ詳記ス可シ

其登録ヲ經タル者ハ登録證ヲ下付ス可シ

第三條 商標ノ登録ヲ願出ツル者アルトキハ願書ノ日附ヨリ二ヶ月

間之ヲ留置其間ニ之ヲ抵觸ス可キ願書到達セサレハ之ヲ登録ス可シ

若シ二人以上同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ専用センカ爲メ登録ヲ願出ツル者アリ抵觸スルトキハ其願書日附ノ後ナル者ヲ却下ス其日附同シキ者ハ共ニ之ヲ却下ス可シ

第四條 登録商標ハ農商務卿ニ於テ衆庶ノ觀覽ニ供スル爲メ便宜ノ方法ヲ定ム可シ

第五條 左ノ商標ハ登録ヲ願出ツルコトヲ得ス

- 一 已ニ登録セル商標ト同一又ハ相紛ラハシキ商標ニシテ同一種類ノ商品ニ用フル者
- 二 地名人家號會社名ノミヲ以テスル者又ハ商品普通ノ名稱或ハ内外國ノ旗章ノミヲ以テスル者
- 三 同業者普通ニ用ヒ又ハ商業上慣用セル目印ヲ以テスル者
- 四 新ニ使用スル商標ニシテ本條例頒布以前ヨリ現ニ使用者アル者

商標ト同一又ハ相紛ラハシキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ用フル者

第六條 登録商標主其専用年限中轉籍轉居又ハ氏名ヲ變換シタルトキ及廢業シ又ハ休業一ケ年ニ及ヒタルトキハ三ヶ月以内ニ之ヲ届出ツ可シ

第七條 登録商標専用年限中其相續者ニ於テ其業ヲ相續シタルトキハ三ヶ月以内ニ之ヲ届出ツ可シ

第八條 登録商標主其商標ノ専用權ヲ他人ニ讓與又ハ分與セントスルトキハ更ニ其登録ヲ願出ツ可シ但専用年限ハ最初登録ノ日ヨリ通算ス可シ

第九條 登録商標ヲ他ノ種類ノ商品ニ兼用若クハ轉用シ又ハ之ヲ改正セントスルトキハ更ニ其登録ヲ願出ツ可シ
前項ノ場合ニ於テハ第三條ニ依テ處分ス可シ

第十條 登録商標専用滿期ノ後之ヲ續用セントスル者ハ滿期三ヶ月

前ニ更ニ其登録ヲ願出ツ可シ

第十一條 登録證ヲ毀損遺失シタルトキハ其再渡ヲ願出ツ可シ

第十二條 商標ヲ登録セシ後第五條ニ觸レ又ハ登録願書及見本明細書ニ相違ノ事實アルコトヲ發見シタルトキハ其登録無効ニ歸シ登録證ヲ返納セシム可シ

第十三條 登録商標主其業ヲ廢シタルトキハ廢業ノ日ヨリ其專用權ヲ失ス休業三ケ年ニ及フ者亦同シ

第十四條 商標ノ登録ヲ願出ツル者ハ左ノ手数料ヲ納ム可シ但願書ヲ却下スルトキハ之ヲ返付ス

一 商標一個ニ付金拾圓但一商標ヲ數種ノ商品ニ兼用若クハ轉用スル者ハ其商品一種コトニ金五圓ヲ加フ

二 商標ノ讓與分與又ハ改正ヲ願出ツル者及滿期續用ヲ願出ツル者ハ商標一個ニ付金五圓

三 登録證ノ再渡ヲ願出ツル者ハ商標一個ニ付金壹圓

第十五條 登録商標主其專用權ヲ侵サレタルトキハ之ヲ告訴シ並要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第十六條 登録商標ヲ偽造シテ使用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス其盗用シタル者ハ一等ヲ減ス

第十七條 登録商標ニ相紛ラハシキ商標ヲ造リテ使用シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十八條 第十六條第十七條ノ違犯ニ係ル商標ヲ附シタル商品ヲ情ヲ知テ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第十六條第十七條第十八條ノ場合ニ於テハ仍ホ違犯ノ商標ヲ沒收ス其商品ト分離スヘカラサルモノハ商品ヲ破毀セシム

第二十條 詐偽ノ所爲ヲ以テ商標ノ登録ヲ得及商標ノ登録ヲ詐稱シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下

ノ罰金ヲ附加ス

第二十一條 第六條第七條ノ届出ヲ其期限内ニ爲サ、ル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十三條 第十六條ヨリ第十八條ニ至ルノ罪ハ登録商標主ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十四條 登録商標主告訴ヲ爲シタルトキハ裁判官ニ於テ假ニ其告訴ニ係ル商標ヲ附シタル商品ノ發賣ヲ停止スルコトヲ得

附則

本條例頒布以前使用スル商標ヲ專用セント欲スル者ハ本條例施行ノ日ヨリ六ヶ月間ニ於テ其登録ヲ願出ツ可シ其願書ハ本條例施行ノ日ヨリ八ヶ月間之ヲ留置其間ニ之ト抵觸ス可キ願書到達セザレハ之ヲ登録ス可シ

若シ二人以上同一又ハ相紛ラハンキ商標ヲ同一種類ノ商品ニ專用セ

ンカ爲メ登録ヲ願出ツル者アリ抵觸スルトキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラヌ農商務卿ニ於テ其商標ノ使用最久シキト認定スルモノヲ登録シテ其他ヲ却下ス可シ

本條例第三條ニ依リ處分ス可キ願書ト雖モ本條例施行ノ日ヨリ八ヶ月間之ヲ留置附則第一項ニ依リ願出ツルモノニ抵觸スルトキハ其願書日附ノ前後ニ拘ハラヌ之ヲ却下ス可シ
前二項ノ場合ニ於テ願書ヲ却下スルトキハ其手数料ヲ返付ス

○商標登録願手續第十七年六月十三號布達
今般商標條例制定候ニ付商標登録願手續別冊ノ通相定ム
(別冊)

商標登録願手續

第一條 商標ニ關スル願書届書ハ都テ地方廳ヲ經テ農商務省ニ差出ス可シ

第二條 商標ノ登録ヲ願出ツルトキハ商標見本五枚及手数料ヲ添へ願書並明細書各二通ヲ差出ス可シ

第三條 一箇ノ商標ヲ二種以上ノ商品ニ用ヒンカ爲メ又ハ二箇

以上ノ商標ヲ一種ノ商品ニ用ヒシカ爲メ登録ヲ願出ツルトキハ其商品一種又ハ商標二箇毎ニ各別ノ願書及明細書ヲ差出ス可シ

第四條 條例第七條ニ據リ相續ヲ届出ツルトキ其死亡後相續ニ係ル者ハ相續者並身元詳ナル證人二名以上連署シ其生存中ノ相續ニ係ル者ハ登録商標主相續者連署ス可シ

第五條 條例第八條ニ據リ讓與分與ヲ願出ツルトキハ讓主讓受主連署シ讓主ヨリ登録證並約定書寫及手数料ヲ添へ願書二通並明細書分與願ニハ二通ヲ差出ス可シ

其登録ヲ經タルトキハ分受人ニハ別ニ分受登録證及明細書ヲ下附シ分與人又ハ讓受人ニハ前登録證及明細書ニ裏書捺印シテ之ヲ下付ス可シ

第六條 條例第九條ニ據リ登録商標ノ轉用兼用及改正ヲ願出ツルトキハ第二條ニ準據ス可シ

第七條 條例第十條第十一條ニ據リ商標ノ續用及登録證ノ再渡ヲ願出ツルトキハ手数料ヲ添へ願書二通ヲ差出ス可シ

第八條 登録願書ヲ却下スルトキハ其理由ヲ指示ス可シ

第九條 登録商標主ハ其商標ノ彩色ヲ適宜變換スルコトヲ得

第十條 登録商標主ハ農商務省ノ指揮ニ隨ヒ商標又ハ其寫書ヲ登録證下付ノ日ヨリ三十日以内ニ差出ス可シ

第十一條 登録商標ヲ使用スル商品ノ種類ヲ定ムルコト左ノ如シ但願人ニ於テ其種類ヲ判知シ難キモノハ農商務省ニ於テ之

ナ判定ス可ク

- 第一種 商品ノ種類
- 第二種 化學品及藥劑 酸類 鹽類 「アルカリ」漂白粉 護謨 樹脂 膠 燐 石鹼 酒精 「グリセリン」 「キナエン」 「モルヒテ」 丁幾劑 舍利別 煎劑 丸藥 膏藥 藥油 麝香 丁子等
- 第三種 染料及顏料 藍玉 藍錠 紫根 紅 朱 丹 綠青 燒青 洋靛 白粉 胡粉 藤黃等
- 第四種 塗料 漆 假漆 「ペンキ」 澁 靴墨等
- 第五種 香料及燻料 香油 髮膏 香袋 香水 炷香 線香 煉香等
- 第六種 金屬及其半加工品 銑鐵 鍛鐵 鋼鐵 條鐵 鐵葉 鐵板 銅 銅板 銅鐵線 鉛 鉛板 亞鉛 亞鉛板 錫 合金等
- 第七種 金屬ノ製品 鑄物 打物 彫鏤品及編物等
- 第八種 利器及尖刃器 鎌 鋸 鑿 錐 鑿 針 釘 剪刀 小刀 剃刀 庖丁 齋嘴等
- 第九種 貴金屬及其製品(アルミニウム金ニツケル銀ノ製品モ此中ニ屬ス) 黃金 銀 四分一 紫銅其他貴金屬ノ合金鏤品及彫鏤品等
- 第十種 珠寶及其彫鏤品 珊瑚珠 眞珠 瑪瑙 水晶 黃玉 碧玉等及其模造品

- 第十種 鑛物類(但石炭ハ第五十一種ニ屬ス)
- 第十一種 石材及其製品并彫鑿品 石板石 大理石 砥石 石器等及其模造品
- 第十二種 漆喰類 漆喰「セメント」石膏等
- 第十三種 陶磁器類 諸種ノ陶磁器 土器 坩堝 瓦 煉化石等
- 第十四種 七寶燒
- 第十五種 玻璃及其製品 玻璃燭 玻璃管 彩色玻璃等
- 第十六種 機械類 紡績機 裁縫機 製糖機 印刷機械其他 諸製造機械 蒸氣ノ機關及罐等
- 第十七種 農工器具 鋤 鉞 唐箕 熊手 釘板 鐵鏈 繩 墨等
- 第十八種 學術上ノ器械類 理化學 醫術及測量等ノ器械
- 第十九種 度量權衡
- 第二十種 運送用ノ車類 荷車 馬車 人力車 自轉車等
- 第二十一種 樂器 琴 三味線 胡弓 笛等
- 第二十二種 時計及其付屬品
- 第二十三種 銃砲 彈丸 火藥 烟火類
- 第二十四種 蠶種紙 繭 繭
- 第二十五種 真綿及木綿綿
- 第二十六種 生絲 絹絲及天蠶絲琴糸 金絲 銀絲等モ此中ニ屬ス

- 第二十七種 綿絲
- 第二十八種 毛絲
- 第二十九種 麻絲
- 第三十種 絹織物
- 第三十一種 木綿織物
- 第三十二種 毛織物
- 第三十三種 麻織物
- 第三十四種 絹綿麻毛外ノ織物及各種ノ交織物
- 第三十五種 絲類ノ編物及組物 「レース」打紐 網等
- 第三十六種 被服 諸種ノ衣服 織物製帽子 手套 足袋 織物製雨衣 袴 目利安等
- 第三十七種 釀造物及飲料 諸種ノ酒 酢 醬油 蜜柑水 曹達水等
- 第三十八種 砂糖 諸種ノ砂糖 糖蜜 蜂蜜等
- 第三十九種 菓子及麵包類 干菓子 蒸菓子 掛ケ物 西洋菓子 餡 砂糖漬等
- 第四十種 茶及咖啡類
- 第四十一種 煙草類
- 第四十二種 穀菜種子及菓物類 五穀 蔬菜 菓 菓實 種子 根球等
- 第四十三種 挽粉澱粉及其製品 諸種ノ挽粉 澱粉 麵類 湯波 蒟蒻 凍豆腐 凍蒟蒻等

- 第四十四種 味噌 膏物及漬物類
- 第四十五種 肉類 海草ノ貯藏食品 鯉節 鰯 乾鮑 海苔
- 昆布 佃煮 罐詰 雲丹 諸種ノ鹹製品等
- 第四十六種 牛乳製品 凝乳 乳油 乳餅 乳粉等
- 第四十七種 煙具及袋物 諸種ノ煙管 煙袋 煙管筒 懷中物等
- 第四十八種 紙及其製品 諸種ノ紙 色紙 短冊 擬草紙
- 油紙 澁紙 書筒筒 張文匣 一閑張 元結等
- 第四十九種 筆墨類 筆 墨 朱墨 印肉 墨汁 石筆 鉛筆 洋筆等
- 第五十種 皮革及其製品 馬具 革包 文匣 革帶 靴等
- 第五十一種 燃料 諸種ノ炭 附木 摺附木 燈心等
- 第五十二種 油蠟類 諸種ノ油 蠟 蠟燭 脂肪等
- 第五十三種 肥料 干鰯 鯡粕 油粕 骨粉等
- 第五十四種 木竹材 木竹材
- 第五十五種 木竹籐製品及其漆塗蒔繪品類 指物 挽物 曲物 桶類 編物 組物等
- 第五十六種 角甲牙類ノ製品 墨表 筵 編笠 繩 麥藁細工
- 第五十七種 藁及草ノ製品 墨表 筵 編笠 繩 麥藁細工
- 第五十八種 傘杖及履物 諸種ノ傘 杖 下駄 草履 鼻緒等

- 第五十九種 扇子及團扇
- 第六十種 提燈及ランプ類
- 第六十一種 齒磨及洗粉
- 第六十二種 刷子類
- 第六十三種 玩具類 花管 鞠 碁 將棊 人形 獨樂 楊弓 押繪 造花 骨牌等
- 第六十四種 錦繪及寫真類
- 第六十五種 書籍新聞紙雜誌類

○第十類

○遺失物取扱規則明治九年四月
第五十六號布告

沿革略記 明治三年十二月新律綱領六年五月改定律例中得遺失物例ヲ設ク○九年第五十五號布告ヲ以テ新律綱領得遺失物例ヲ改正シ改定律例同條例第二百八十二條以下ヲ刪除ス○同年四月第五十六號布告ヲ以テ遺失物取扱規則ヲ制定ス是レ現行法ナリ

遺失物取扱規則左ノ通相定候條此旨布告候事

遺失物取扱規則

第一條 凡遺失物ト稱スルハ自ラ其遺失スルヲ覺ラス及ヒ其所在ノ明カナラサルモノヲ云フ故ニ若シ其物ヲ得ルニ臨テ物主其場ニ就テ其主タルヲ證明スルニ於テハ直ニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ論スルヲ得ス

第二條 凡遺失ノ物ヲ得レハ五日內ニ其主ニ還シ其主分明ナラザレ

ハ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜示シ一年內其主ナキ時ハ之ヲ得者ニ給ス

第三條 凡遺失者ハ其遺失スル物品ノ模様員數并ニ遺失ノ日時場所等ヲ可成丈ケ詳細ニ記載シ速カニ官ニ届出ヘシ但得者ヨリ其返還ヲ得ル時モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第四條 凡遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖モ其費用ヲ償ハシムルヲ得且得者ニ報勞ノタメ其物價百分ノ五ヨリ少カラズ貳拾ヨリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ若シ物主得者ト其價格ヲ争フ時ハ官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條 凡遺失物ヲ得ルニ物品盜賊ニ係ルモノハ直ニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止メ其費用ノミヲ償ハシム

第六條 官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得ルモノハ之ヲ官ニ送ルヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ歸スヘシ若シ借地人其借地ヨリ掘得タルトキハ之ヲ地主ト中分セシム(十四年第二號布告ヲ以テ但書共改正)

但盜賊ニ係ルモノハ此限ニアラス

第七條 凡遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサル時ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第八條 凡家畜ノ類他所ニ逸走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルヲ第二條第四條ニ同シ若シ他人ノ財産ヲ毀損スル時ハ律ニ照シテ處分ス

第九條 凡逸走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ若シ八日內其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルヲ第二條ノ如シ

第十條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルヲ私物ニ異ナルヲナシ

十四年第七十二號布告前例處罰方參符以下條之第十四類ニ載ス

第十一條 凡警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハス遺失物ヲ得レハ速ニ之ヲ官ニ送り全ク其主ニ還付シ其主ナケレハ之ヲ官ニ没ス

第十二條 凡一切應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ論セス並ニ官ニ没ス

第十三條 凡公私債證書地券諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ論スルヲ得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條 凡遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得若クハ埋藏物ヲ掘得テ官私ニ全ク送還セス或ハ物主ノ其主タルヲ證明スルニ冒認シテ返還セサル者ハ並ニ律ニ照シテ處分ス

○埋藏物中古代ノ品物處分十年九月甲第二十號布達
明治九年四月太政官第五拾六號ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋藏物掘得ル者處分ノ儀公布相成候處右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徵スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省ヘ届出檢査ヲ可受其品ニヨリ相當代價ヲ以テ購求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高ヲ發掘人ヘ下附シ該物品ハ永ク博物館ヘ陳列可致候條此旨布

違候事

但物品ハ先ツ掘出地名及形狀等ヲ詳記シ及撰寫スルモノヲ郵送シ其見込アルモノニテ遞送方相違候後本文ノ通り可取計候事

○富興行ヲ禁ス明治元年十二月

富興行ノ儀ハ兼テ御禁制ニ有之處近年諸國ニ於テ金錢融通ヲ名トシ或ハ社寺再建等ニ托シ興行致候向モ有之趣元來澆季ノ弊風僥倖ノ利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ自然農工商共其職業ヲ惰リ往々是カ爲メニ家産ヲ破候者モ不少哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候斯御一新ノ折柄右様ノ所業殊ニ御趣意ニ相戾リ候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事

○富鐵賣買者等處分明治十五年五月

明治元年十二月二十三日ノ布告ニ原ツキ富鐵賣買ノ牙保幫助ヲ

爲シ及富籤ヲ購買シタル者處分方左ノ通制定ス

第一條 凡富籤賣買ノ牙保若クハ幫助ヲ爲シタル者ハ一月以上

六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二條 凡富籤ヲ購買シタル者ハ其價ヲ拂ヒタルト未タ拂ハサ

ルトヲ問ハス二十日以上四月以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四

拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス他人ノ名ヲ借リテ購買シタル者及他

人ヨリ譲リ受ケタル者亦同シ

第三條 第一條第二條ノ罪ヲ再犯シタル者ハ同條ニ定メタル刑

期金額ノ二倍ニ處ス但初犯ニ科シタル刑期金額ニ下ルヲ得

ズ

第四條 富籤ニ關スル犯罪ヲ告發シタル者ニハ其徵スル所ノ罰

金ノ半額ヲ給與ス

第五條 富籤ニ關スル罪ヲ犯シ事未タ發覺セサル前ニ於テ官ニ

自首シタル者ハ其罪ヲ免ス

再犯ニ係ル者ハ自首スト雖モ其罪ヲ免セス

第六條 富籤ニ關スル犯罪ニ因テ得タル財物ハ之ヲ沒收ス

自首ニ因テ罪ヲ免シタル者ト雖モ財物沒收ハ仍ホ前項ニ依ル

○

○賭博犯處分規則 明治十七年一月
第壹號布告

賭博犯ノ儀ハ刑法第二百六十條第二百六十一條ニ明文有之候ヘトモ

當分ノ内行政警察ノ處分ニ屬シ東京ハ警視廳其他ハ地方官ヲシテ別

紙賭博犯處分規則ニ依リ取締懲罰ノ事ヲ行ハシム

(別紙)

賭博犯處分規則

第一條 賭博ヲ爲シタル者ハ一月以上四年以下ノ懲罰及ヒ五圓以上

貳百圓以下ノ過料ニ處ス家屋ヲ貸與シ及ヒ見張ヲ爲シ其他總テ幫

助ヲ爲シタル者亦同シ
 博徒ニシテ黨類ヲ招結シ又ハ賭場ヲ開張シ又ハ兇器ヲ携帯シ又ハ
 四隣ニ横行スル者ハ一年以上十年以下ノ懲罰及ヒ五拾圓以上五百
 圓以下ノ過料ニ處ス其招結ニ應シタル者ハ賭博ヲ爲サスト雖モ前
 項ニ依テ處分ス
 第二條 賭具及賭場ニ現存スル財物ハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ没入
 ス
 第三條 賭博犯ヲ取押フルニハ何人ノ家宅ヲ問ハス何時タリトモ之
 ニ立入ルコトヲ得但警察官巡查ハ其證票ヲ携帯スヘシ
 第四條 此規則ヲ施行スルノ方法細則ハ警視總監府知事東京府縣令
 ニ於テ便宜之ヲ定メ内務卿ノ許可ヲ得テ施行スルコトヲ得

○集會條例 明治十三年四月
第十二號布告

集會條例別冊ノ通被定候條此旨布告候事

(別冊)

集會條例

第一條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ公眾ヲ集ムル者ハ開
 會二日前ニ講談論議ノ事項講談論議スル人ノ姓名住所會同ノ場所
 年月日ヲ詳記シ其會主又ハ會長幹事等ヨリ管轄警察署ニ届出テ其
 認可ヲ受クヘシ

第二條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ結社何等ノ名義ヲ以
テスルモ其實政
治ニ關スル事項ヲ講談論議ス
ル爲メ結合スルモノヲ併稱ススル者ハ結社前其社名社則會場及ヒ
 社員名簿ヲ管轄警察署ニ届出テ其認可ヲ受クヘシ其社則ヲ改正シ
 及ヒ社員ノ出入アリタルトキモ同様タルヘシ此届出ヲ爲スニ當リ
 警察署ヨリ尋問スルコトアレハ社中ノ事ハ何事タリトモ之レニ答
 辯スヘシ(十五年第廿七號
布告ヲ以テ改正)

前項ノ結社及其他ノ結社ニ於テ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル
爲メニ集會ヲ爲サントスルトキハ仍ホ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ
(十五年第廿七號布告ヲ以テ本項追加)

第三條 講談論議ノ事項講談論議スル人員會場及ヒ會日ノ定規アル
者ハ其定規ヲ初會ノ二日前ニ警察署ニ届出認可ヲ受クルトキハ爾
後ノ例會ハ届出ニ及ハスト雖モ之ヲ變更スルトキハ第一條ノ手續
ヲ爲スヘシ

第四條 管轄警察署ハ第一條第二條第三條ノ届出ニ於テ治安ニ妨害
アリト認ムルトキハ之ヲ認可セス又ハ認可スルノ後ト雖モ之ヲ取
消スコトアルヘシ(十五年第廿七號布告ヲ以テ改正)

第五條 警察署ヨリハ正服ヲ着シタル警察官ヲ會場ニ派遣シ其認可
ノ證ヲ檢査シ會場ヲ監視セシムルコトアルヘシ
警察官會場ニ入ルトキハ其求ムル所ノ席ヲ供シ且其尋問アルトキ
ハ結社集會ニ關スル事ハ何事タリトモ之ニ答辯スヘシ(十五年第廿七號布告ヲ以テ改正)

以テ本項追加)

第六條 派出所ノ警察官ハ認可ノ證ヲ開示セサルトキ講談論議ノ届書
ニ掲ケサル事項ニ亘ルトキ又ハ人ヲ罪戾ニ教唆誘導スルノ意ヲ含
ミ又ハ公衆ノ安寧ニ妨害アリト認ムルトキ及ヒ集會ニ臨ムヲ得サ
ル者ニ退去ヲ命ジテ之ニ從ハサルトキハ全會ヲ解散セシムヘシ
但(十三年第廿七號布告ヲ以テ追加)

前項ノ場合ニ於テ解散ヲ命ジタルトキ地方長官東京ハ警視長官ハ其情狀
ニ依リ演說者ニ對シ一箇年以内管轄内ニ於テ公然政治ヲ講談論議
スルヲ禁止シ其結社ニ係ルモノハ仍ホ之ヲ解散セシムルコトヲ得
内務卿ハ其情狀ニ依リ更ニ其演說者ニ對シ一箇年以内全國内ニ於
テ公然政治ヲ講談論議スルヲ禁止スルコトヲ得(十五年第廿七號布告ヲ以テ本項追加)

第七條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル集會ニ陸海軍人常備豫備
後備ノ名籍ニ在ル者警察官官立公立私立學校ノ教員生徒農業工藝
ノ見習生ハ之ニ臨會シ又ハ其社ニ加入スルコトヲ得ス

第八條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ其旨趣ヲ廣告シ又ハ委員若クハ文書ヲ發シテ公衆ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ社ト連結通信スルコトヲ得ス(十五年第廿七號布告ヲ以テ改正)

第九條 政治ニ關スル事項ヲ講談論議スル爲メ屋外ニ於テ公衆ノ集會ヲ催スヲ得ス

十四年第七十二號布告例處方案以下條之第十四類ニ載ス

第十條 第一條ノ認可ヲ受ケスシテ集會ヲ催スモノ會主ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其會席ヲ貸シタル者並ニ會長幹事及ヒ其講談論議者ハ各貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ第二條ノ規程ヲ犯シタル者モ亦本條ニ依ル

第十一條 第二條第一項ノ規程ニ背キテ届出ヲ爲サス又ハ尋問スル所ノ事項ヲ開答セサルトキ社長ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處シ詐欺ノ届出ヲ爲シ或ハ尋問ヲ得テ偽答スルトキ社長ハ右罰金ノ外尙ホ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス(十五年第廿七號布告ヲ以テ改正)

第十二條 第五條ノ規程ニ背キ派出所警察官ノ臨席ヲ肯セス又ハ其求

ムル所ノ席ヲ供セサルトキ會主會長及社長幹事ハ各五圓以上五拾圓以下ノ罰金若クハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ警察官ノ尋問ニ答ヘス又ハ偽答スル者ハ同罪ニ處ス再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス(十五年第廿七號布告ヲ以テ改正)

第十三條 派出所警察官ヨリ解散ヲ命シタル後尙退散セサル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上六月以下ノ禁獄ニ處ス

第十四條 第七條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及ヒ社長幹事ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金若クハ十一日以上三月以下ノ禁獄ニ處シ其他情狀ノ重キモノアレハ其社ヲ解散セシム其制限ヲ犯シテ入社シ又ハ臨會スル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第八條ノ制限ヲ犯シタルトキ會主會長及ヒ社長幹事ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金若クハ一年以上二年以下ノ禁獄ニ處シ其社ヲ解散セシム此事ニ關スル者モ亦同罪ニ處シ脅迫スル者及ヒ罪

再犯ニ當ル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ二月以上三年以下ノ禁獄ニ處シ其社長幹事ハ一年以上五年以下結社又ハ入社ヲ禁ス

第十六條 學術會其他何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ハラヌ多衆集會スル者警察官ニ於テ治安ヲ保持スルニ必要ナリト認ルトキハ之ニ監臨スルコトヲ得若シ其監臨ヲ肯セサルトキハ第十二條ニ依テ處分ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ改正)

學術會ニシテ政治ニ關スル事項ヲ講談論議スルコトアルトキハ第十條ニ依テ處分ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ本項追加)

第十七條 前條ノ場合ニ於テ治安ヲ妨害スト認ムルトキハ第六條ニ依テ處分ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

第十八條 凡ソ結社若クハ集會スル者内務卿ニ於テ治安ニ妨害アリト認ムルトキハ之ヲ禁止スルコトヲ得若シ禁止ノ命ニ從ハス又ハ仍ホ秘密ニ結社若クハ集會スル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金若クハ三月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

第十九條 成法ニ制定スル所ノ集會ハ此限ニ在ラス(十五年第廿七號 布告ヲ以テ追加)

○官吏ノ講談演說ヲ許サヌ十二年五月 號外達
凡ソ官吏タル者其職務ニ係ル外政談講學ヲ目的トシテ公衆ヲ聚メ講談演說ノ席ヲ開ク等不都合ノ儀ニ付右等ノ儀無之儀各長官ニ於テ取締可致此旨相達候事

○爆發物取締罰則明治十七年十二月 第三拾貳號 布告

爆發物取締罰則別冊ノ通制定ス

(別冊)

爆發物取締罰則

第二條 治安ヲ妨ケ又ハ人ノ身體財産ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタル者及ヒ人ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑

ニ處ス

第二條 前條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用セントスルノ際發覺シタル者ハ無期徒刑又ハ有期徒刑ニ處ス

第三條 第一條ノ目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四條 第一條ノ罪ヲ犯サントシテ脅迫教唆煽動ニ止ル者及ヒ共謀ニ止ル者ハ重懲役ニ處ス

第五條 第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造輸入販賣讓與寄藏シ及ヒ其約束ヲ爲シタル者ハ重懲役ニ處ス

第六條 爆發物ヲ製造輸入所持シ又ハ注文ヲ爲シタル者第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアラサルコトヲ證明スルコト能ハサル時ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七條 爆發物ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官吏ニ告知ス可シ違フ者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 本則ニ記載シタル重罪犯アルコトヲ認知シタル時ハ直ニ警察官吏若クハ危害ヲ被ムラントスル人ニ告知ス可シ違フ者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第九條 本則ニ記載シタル重罪ノ犯人ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメ又ハ其罪證ヲ湮滅シタル者ハ正犯ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス

第十條 本則ニ記載シタル重罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第八十條及ヒ第八十一條ノ例ヲ用ヒス但十六歳未満ニシテ是非ノ辨別ナキ者ハ刑法ニ從フ

第十一條 第一條ニ記載シタル犯罪ノ豫備隱謀ヲ爲シタル者ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ官ニ自首シ因テ危害ヲ爲スニ至ラサル時ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付ス第五條ニ記載シタル犯罪者モ亦同シ

第十二條 本則ニ記載シタル犯罪刑法ニ照シ仍ホ重キ者ハ重キニ從テ處斷ス

○第十一類

○裁判所位置 明治十六年一月 第貳號布告

沿革略記

明治四年十二月布告ヲ以テ司法省内ニ始テ別局ヲ設ケ當分東京裁判所ト稱ス○五年八月達ヲ以テ神奈川外二縣ニ裁判所ヲ置ク○同年同月達ヲ以テ足柄外七縣ニ裁判所ヲ置ク○同年九月達ヲ以テ兵庫縣ニ裁判所ヲ置ク○同年十月達ヲ以テ京都府ニ裁判所ヲ置ク○同年同月達ヲ以テ大坂府ニ裁判所ヲ置ク○同年同月達ヲ以テ靜岡外五縣ニ裁判所ヲ置ク○六年六月司法省第九十八號達ヲ以テ宇都宮裁判所ヲ栃木裁判所ニ合併シ印旛水更津兩裁判所ヲ合シテ千葉縣ニ移シ入間群馬兩裁判所ヲ合シテ熊谷縣ニ移ス○七年一月達ヲ以テ開拓使管下渡島國箱館ニ裁判所ヲ置ク○同年同月達ヲ以テ長崎縣ニ裁判所ヲ置ク○同年四月達ヲ以テ佐賀縣ニ裁判所ヲ置ク○同年十二月達ヲ以テ新潟福島兩縣ニ裁判所ヲ置ク○八年五月達ヲ以テ新治裁判所ヲ廢ス○同年同月第九十二號布告ヲ以テ上等裁判所ヲ東京大坂福島長崎ニ置ク○同年八月第百二十七號布告ヲ以テ福島上等裁判所ヲ宮城ニ移ス○同年十二月第百九十三號布告ヲ以テ鹿兒島外二縣ニ裁判所ヲ置ク○九年三月第二十六號布告ヲ以テ宮

十六年第二十號布告ヲ以テ
七年第二十號布告ヲ以テ
七年第二十號布告ヲ以テ
七年第二十號布告ヲ以テ
七年第二十號布告ヲ以テ
七年第二十號布告ヲ以テ

十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ

控		京									
栃木		氷戸		千葉				八王子		八王子	
宇都宮	宇都宮	下妻	土浦	八日市場	木更津	千葉	八日市場	北條	木更津	千葉	八王子
浦和	栃木	下妻	土浦	水戸	千葉縣				武藏		
栃木縣		茨城縣		常陸		安房		上總		下總	
下野		常陸		常陸		上總		下總		武藏	
河内 芳賀 鹽谷 那須		新治 筑波ノ内 河内 信太 行方 鹿島ノ内 北相馬		東茨城 那珂 久慈 多賀 鹿島ノ内 西茨城		海上 香取 匝瑳		天羽 周准 望陀		下植生 千葉 印旛 南相馬 東葛飾 上植生 夷隅 長柄 市原	
秩父		秩父		秩父		秩父		秩父		秩父	
秩父		秩父		秩父		秩父		秩父		秩父	

十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ
十六年第二十號布告ヲ以テ

訴										
静岡					前橋			浦和		
濱松					太田			熊谷		
掛川	濱松	沼津	下田	静岡	太田	高崎	前橋	大宮	熊谷	川越
静岡縣					群馬縣			埼玉縣		
遠江		伊豆	駿河	伊豆	上野			武藏		
山名 周智 城東 佐野 榛原		鹿玉 濱名	豐田 磐田 長上 敷知 引佐	君澤 田方 加茂ノ内	駿東 富士	那加 加茂ノ内	庵原 有渡 安部 志田 益津	新田 山田 邑樂	碓氷 北甘樂 片岡 綠野 多胡 西群馬ノ内 猪野川以西	東群馬 北勢多 佐位 那波 利根 吾妻 西群馬ノ内 猪野川以東
秩父		秩父		秩父		秩父		秩父		入間 高麗
秩父		秩父		秩父		秩父		秩父		北埼玉 比企 男衾 横見 大里 榛澤 庵羅 兒玉 賀美 那賀

裁判所位置

所										
新潟										
		相川	高田	高田	六日町	柏崎	長岡	村上	新發田	新潟
伏見	京都	相川	糸魚川	高田	六日町	柏崎	長岡	村上	新發田	新潟
新潟縣										
越後										
山城		佐渡								
乙訓 紀伊 宇治ノ内	上京區 愛宕 葛野 宇治ノ内	全國三郡	西頸城	中東頸城	中南魚沼	刈羽ノ内	古志 北魚沼 三島 刈羽ノ内	岩船	北蒲原	新潟區 西中蒲原

長野										甲府	
上田	松本										
岩村田	上田	福島	大町	上諏訪	飯田	松本	飯山	長野	谷村	甲府	
長野縣										山梨縣	
信濃										甲斐	
北南佐久	小縣 埴科ノ内 更級ノ内	西筑摩ノ内	東筑摩ノ内 南安曇ノ内	上伊奈ノ内 諏訪	上伊奈ノ内 下伊奈	東筑摩ノ内 南安曇ノ内 上伊奈ノ内	下高井 上水内ノ内 下水内	埴科ノ内	上水内ノ内 上高井 更級ノ内	北南都留	東山梨 西八代 北中巨摩

十六年第二十號布告ヲ以テ
阿蘇山治安裁判所ヲ宮津支廳ノ管内ニ改ム

十六年第二十號布告ヲ以テ
阿蘇山治安裁判所ヲ宮津支廳ノ管内ニ改ム

裁判所位置

控									
大津		岡山				神戸			
彦根		津山		豐岡		姫路		洲本	
福井	大津	津山	高梁	岡山	岡山	龍野	姫路	洲本	
滋賀縣		岡山縣				兵庫縣			
近江		美作	備前		但馬	播磨		淡路	
南條今立丹生吉田坂井足羽		全國十二郡	上房阿賀哲多川上加陽ノ内	小田後月下道窪屋淺口	宇都加陽ノ内	岡山區 全國八郡	全國八郡	多可加西印南神東神西飾東飾西加東加古	揖西揖東赤穂佐用宍粟

七百十七

大阪 大 京都

大阪										京都		
奈良					宮津					園部		
篠山	明石	神戸	五條	奈良	堺	天王寺	中ノ島	宮津	福知山	京都府		
大坂府										丹波		
丹波	播磨	攝津	大和		河内	和泉	攝津	河内	丹後	丹波	丹波	丹波
多紀 氷上	明石 美嚢	神戸區 八部 荻原 武庫 川邊 有馬	市廣瀬 宇陀 高市ノ内 葛下ノ内 宇智 吉野 葛上 忍海 高市ノ内 葛下ノ内		添上 添下山邊 平群 式上 式下 十	安宿 丹南 八上 古市 石川 錦部 志紀ノ内 丹北ノ内 大和川以南	東區 南區 東成 住吉	西區 北區 西成 島上 島下 豐島 能勢 讀良 交野 茨田	熊野 竹野 中與謝 加佐ノ内	天田 何鹿	加佐ノ内	船井 南桑田

七百十六

十六年第二十號布告ヲ以テ田邊ニ支廳ヲ置ク

裁判所位置

所										判	
松山						高知		徳島		田邊	
高松	宇和島					中村		脇町		田邊	
丸龜	高松	宇和島	大洲	西條	松山	中村	高知	脇町	徳島	田邊	
愛媛縣						高知縣		徳島縣			
讚岐		伊豫				土佐		阿波			
阿野ノ内	那珂多度	小豆	大内	寒川	三木	山田	香川	日高	西牟婁		
			北南東	宇和	喜多	西宇和	宇摩	新居	周布	桑村	
					伊豫	温泉	野間	久米	風早	上	
							幡多			下	
							安藝	香美	長岡	土佐	
										吾川	
										高岡	
										美馬	
										三好	
										麻植	
										阿波	

七百十九

十六年第二十號布告ヲ以テ金澤治安裁判所管内ニ波野ヲ置ク

十六年第二十號布告ヲ以テ富山支廳ヲ本廳トナス

裁 訴

和歌山	富山			金澤			福井			
				七尾			小濱			
和歌山	高岡	魚津	富山	輪島	七尾	小松	金澤	敦賀	小濱	大野
和歌山縣	富山縣			石川縣			福井縣			
紀伊	越中			能登	加賀		若狹	越前	若狹	
海部	有田	射水	礪波	下新川	上新川	婦負	珠洲	鳳至	鹿島	羽咋
										能美
										江沼
										金澤區
										河北
										石川
										遠敷
										大飯
										大野

七百十八

十六年第二十號布告ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ

裁判所位置

裁		訴				控				
大分		福岡				福岡			唐津	
中津		久留米				久留米			唐津	
豆田	中津	杵築	竹田	佐伯	大分	小倉	柳川	久留米	福岡	唐津
大分縣		福岡縣				福岡縣				
豐後	豐前	豐後		筑前	豐前	筑後	筑前	東松浦		
玖珠	下毛	西國東	直入	南海部	遠賀	三池	竹野	福岡區 唐田 粕屋 宗像 糟波 早良 嘉麻 上座 下座 夜須 御笠 志摩 怡土 那珂		
日田	宇佐	速見ノ内	大野ノ内	北海部ノ内	企救	山門	山本	三潞ノ内 上妻 下妻 生葉 御原 御井		
					京都			三潞ノ内		
					中津			三潞ノ内		
					筑城			三潞ノ内		
					上毛			三潞ノ内		

七百二十三

十六年第二十號布告ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ

十六年第二十號布告ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ
 以テ久留米郡治所ヲ以テ

崎		長				所			
佐賀		長崎				鳥取		濱田	
佐賀		長崎				鳥取		濱田	
佐賀	嚴原	福江	平戸	島原	長崎	米子	鳥取	西郷	濱田
佐賀	嚴原	福江	武生水	平戸	島原	米子	鳥取	西郷	濱田
佐賀縣		長崎縣				鳥取縣			
肥前	對馬	肥前	壹岐	肥前	肥前	伯耆	伯耆	隱岐	石見
小城市	基肄	南松浦	全國二郡	北松浦	南高來	汗入	河村	全國四郡	那賀
杵島	養父	西彼杵ノ内				會見	久米		邑智
藤津	三根					八橋			邇摩
	神崎					日野			美濃
	佐賀								鹿足

七百二十二

十七年第二十七號布告ヲ以テ鶴岡ニ治安裁判所ヲ置ク

十六年第二十七號布告ヲ以テ大曲ニ治安裁判所ヲ置ク
 十六年第二十七號布告ヲ以テ秋田ニ治安裁判所ヲ置ク
 十七年第二十七號布告ヲ以テ大曲ニ治安裁判所ヲ置ク
 十七年第二十七號布告ヲ以テ秋田ニ治安裁判所ヲ置ク

所 判 裁 訴											
秋田				盛岡				山形			
大曲				磐井				酒田		米澤	
横手	大曲	本庄	秋田	磐井	宮古	盛岡	鶴岡	酒田	米澤	新庄	
秋田縣				岩手縣				山形縣			
羽後				陸前	陸中	陸中	陸奥	陸中	羽前	羽後	羽前
雄勝	仙北	由利	川邊	氣仙	東磐井	北南閉伊	北九戸	東田川	飽海	東置賜	最上
平鹿ノ内	平鹿ノ内		南秋田		膽澤		西閉伊	西田川			
					江刺		南岩手				
							紫波				
							稗貫				
							西和賀				

十六年第二十七號布告ヲ以テ大曲ニ治安裁判所ヲ置ク
 十六年第二十七號布告ヲ以テ秋田ニ治安裁判所ヲ置ク

裁判所位置

函 館 控 訴												
函館				弘前								
				八戸								
壽都	福山	江刺	函館	八戸	五所河原	青森	鯉ヶ澤	弘前	大館町	能代		
函館縣				青森縣								
後志	渡島	後志	渡島	陸奥				陸中	羽後			
島牧	松前	久遠	檜山	三戸	北津輕	東津輕	西津輕	南津輕	北秋田	山本		
壽都		太櫓	爾志	上北ノ内		下北						
歌棄		瀬棚	龜田			上北ノ内						
磯谷		奥尻	上磯									
			芽部									

院									
所 判 裁									
根室		札幌							
厚岸	根室	岩内	小樽	増毛	浦川	札幌	札幌	札幌	札幌
根室		札幌							
釧路	根室	後志	北見	天鹽	日高	十勝	釧路	石狩	石狩
全國七郡	北見 根室 釧路 斜里 網走 常呂 紋別	古宇 岩内	古平	小樽 余市 美國 積丹 高島 忍路	宗谷 枝幸 利尻 禮文	全國七郡	全國七郡	此田 有珠 室蘭 札幌 別所 勇拂 白老 千歳	札幌區 全國九郡

○治安裁判所及始審裁判所ノ權限
明治十四年十二月八十三號布告

- 治安裁判所及始審裁判所ノ權限左ノ通制定ス
- 第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニ在ラス
 - 第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス
 - 第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルコトヲ得ス
 - 第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上并ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス
 - 第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス
- 但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スヘシ

十年第十九號布告控訴手續ハ本類ニ載ス

治安裁判所及始審裁判所ノ權限

刑法治罪法實施以降刑事
ニ係ルモノハ治罪法ニ據
ル

○裁判事務心得明治八年六月
第三百三號布告

今般裁判事務心得左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滞ナク裁判スヘシ

疑難アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等ナル裁判所ニ伺出ルヲ得
得ス但シ刑事死罪終身懲役ハ此例ニアラス

第二條 凡ソ裁判ニ服セザル旨申立ル者アル時ハ其裁判所ニテ

辨解ヲ爲スヘカラス定規ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘ

キヲ言渡スヘシ

第三條 民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモソハ習慣ニ依リ習慣ナ

キモノハ條理ヲ推考シテ裁判スヘシ

第四條 裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ

定規トスルヲ得ス

第五條 頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指

令ヲ將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヲ得ス

○裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參又ハ不參スル者處分明治十年一月
第五號布告

凡ソ裁判所ノ呼出ヲ受タル者疾病等ノ事故アリテ遲參又ハ不參スル

時ハ其事故ヲ詳記シ呼出刻限迄ニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ

過キテ届出ル歟又ハ無届ニテ遲參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五

錢以上拾圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

右布告候事

十四年第七十二號布告前
例處斷方參第十四類ニ
載ス

○戸長公證猶豫明治十五年十二月
第六拾號布告

裁判所ノ呼出ヲ受ケ遲參又ハ不參スル者處分 戸長公證猶豫

戸長ニ於テ地所建物船舶賣買讓渡及ヒ質入書入ノ公證ヲ爲スヘキ際該物件又ハ所有主ノ身分ニ關シ既ニ訴訟ヲ起シ公證猶豫ノ儀申立ル者アル時ハ其裁判ヲ執行シ得ヘキ迄公證ヲ爲スヘカラス

○勸解又ハ刑事告訴中公證猶豫十七年三月五日布達

明治十五年十月第六拾號布告ハ勸解又ハ刑事告訴中ナルヲ以テ公證猶豫申立ル者アル場合ニモ適用スヘキモノトス

○身代限規則明治五年六月第八十七號布告

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相達候事

但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服着替共男女共各二通宛

一夜具男女共各一通宛

一人ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用ヰル飯米ヲ殘シ置ク可キ事

但男丁ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥

ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事

一鍋釜及炊具各一通

華士族身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一五年第三百廿七號布告ヲ以テ本項取消

身代限規則

- 一 大小類 男子一人ニ付各一腰宛
 - 一 冠服 男子一人ニ付各一通宛
 - 一 時服着替共男女共各 一通宛
 - 一 夜具 男女共各 一通宛
 - 一 本人職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品
 - 但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事
 - 一 鍋釜及炊具類各 一通
- 右身代限リノ節ハ六十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅へ揭示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取糺ノ上可處置事(六年第七十テ揭示日數三十日トアルヲ六十日ト改ム)

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

一 前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限内訴出シハ現品ヲ取戻スコトヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過ク可ラス

但入札拂ノ日ヨリ二日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前并ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所へ揭示シ及ヒ新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所へ差出スヘシ

○身代限ノ者ニ對シ貸金等約定期限内處分明治六年七月第二百五十二號布告

負債者身代限ニ遇フ節其者へ對シ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ノ分處置振左ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ニハ訴出ル

コナ許サ、ル規則ナレモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿内ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルコトヲ得ヘシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ

權利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ルコトヲ得ヘシ

第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滞ルニ於テハ引受返濟

可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產糶賣

金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人證人ニ掛リ

之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返

濟セント欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又

ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要

トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改テ請人ヲ立請人ヨリ動不動

產ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之ヲ承諾ス

ル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ求ムルコ

トヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期

限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任ス

ト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取り置タ

ル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付已レノ受取ル

可キ金高ヲ求ルコトヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲ス事ヲ拒ムヲ得

可ラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財產糶賣金

ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據

リ處分シ時迄シ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ

於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配ス可キ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲ス可シ

○身代限財産中質入書入ノ地所處分明治八年四月第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ證書ニ付若シ身代限リ財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○異産ノ子弟及隱居身代限處分明治五年九月第二百七十五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財産ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財産ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財産ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財産ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

○僧侶身代限規則明治六年三月第八十八號布告

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相達候事
僧侶身代限規則

抵債トシテ差押フ可ラサル品類

一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升三合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等へ建添候トモ榮耀ニ屬スル箇所ハ此限ニアラス

一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一法衣寺主並所化及尼共各一通宛

一時服着替共寺主並所化及婦女共各二通宛

一夜具寺主並所化及婦女共各一通宛

一鍋釜及炊具類各一通

一本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

○僧侶身代限ニ付寺院所有物處分明治六年三月
第八十九號布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必用ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

一右二帳二部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役所ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ

右之通相達候事

○身代限ノ者他ニ貸附ノ金穀證文アルハ處分七年九月廿三號司法省第廿三號通
金穀ヲ借リ返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ
遭ヒ候トキ所有物ノ内他人ニ貸附置キタル金穀ノ證文之レアル
節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相違置候處詮議ノ次第
有之左之通改正候條此旨相違候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭
フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ニ貸付置キタル金
穀ノ證文有之時ハ其證文ノ定期期限ノ満未滿ヲ論セス證文ニ
記名シタル負債主ニ異儀ヲ尋テ無相違時ハ其負債主ヨリ證文
面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主ニ申渡シ別紙雛形ニ
倣ヒ證文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其證文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ
其證文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事
但シ定期満期ノ證文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ
遭フ者ノ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦
ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ニ貸附置キタ
ル金穀ノ證文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサ
セ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トニ金高
ニ應シ配當シソノ落札ノ證文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據

リ處分スヘキ事
但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及
ブヘキ事

第四條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金
ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之レ
ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ證文ニ記
載シタル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト
餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條 若シ證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨ
リ金ヲ受取ントスルニ證文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代限
ニ遭ヒテ證文ニ記名シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサル
トキハ證文ニ記名シタル負債主ヨリ證文ヲ落札シタル債主ニ
對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ證文ノ裏
書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時裏ニ身代限ニ遭ヒタル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判
所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシ
テ下附スヘシ

第六條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金
ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ裏
ニ身代限ニ遭ヒシ人巳ニ身代持直シタルトキハ直ニ其人ニ
對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事
(證文裏書雛形略ス)

○利息制限法 明治十年九月 第六十六號布告

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十二百圓以上千圓以下百分ノ十五^{一分}千圓以上百分ノ十二^{一分}以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ
第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルハ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六分トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金・棒利等ノ名目ヲ用ル者アルハ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料等ヲ差出スヘキヲ約定スルコトアルハ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

○無利息貸金預ケ金地代手附金等利息請求方 六年三月 司法省 第四十三號 布達

- | | |
|------------------------------|----------|
| 預ケ金穀 | 賣掛代金 |
| 諸職人手間代 | 地代 |
| 店賃 | 立替金穀 |
| 敷金 | 證據金 |
| 受負金 | 手附金 |
| 小作金穀 | 村入用ノ割合金穀 |
| 雇人給金 | 飯料 |
| 諸品ノ損料 | 無利息貸金穀 |
| 右ノ類ニテ金穀等可相渡期限ニ臨ミ渡方延滞致候節ハ其期限ノ | |

六年第九十二號布告ハ利息制限法ニ依リ消滅

日且期限ナクシテ金穀入用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタ分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ雙方示談ヲ以テ利足ノ歩合ヲ定メ證書受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナクシテ追テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九十二號布告ニヨリ處分致シ候條此旨可相心得候事
但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限り本文ノ處分ニ及フ可シ若シ雙方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サ、ル分ハ此例ニアラス(七年司法省第二十二號布告ニ依リ但書追加)

○ 訴答文例 明治六年七月 第二百四十七號布告

今般訴答文例并附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月二日ヨリ原被告人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事

(別冊)

訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

六年第三百三十九號布告
マ以テ訴答文例ハ管分御
國人ノミ遵守セシム

第二章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ村役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ村役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取タル後訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某^縣管下某國某郡某村住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類若シ一戸ノ本主ニ非スシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄介ト記ス可シ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ村役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付ヲ取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フ可シ但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 (七年第七十五號布告ヲ以テ代書人用ヒ方改定)

第三條

第四條

第五條

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲ス可キ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ルコトヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ附錄第一號ヲ見合ヌ可シ

第三 訴狀ハ末ニ署名スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルコト

十七年三月司法省甲第...
號告示ヲ以テ訴訟用紙ハ...
美濃又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ...
定式拾四行式拾字拾ト

能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具ス可シ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載ス可シ若シ八里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返済セサル事情ヲ書ス可シ附錄第二號ヲ見合ヌ可シ

田島ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又

ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取
ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意并願意ヲ簡明
ニ記載ス可シ

但附錄第十八號ヲ見合ス可シ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月
日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル
事情ヲ書ス可シ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等
ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總
計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ證印アルヲ記入シ次ニ違約淹滞シタ

ル事情ヲ書ス可シ附錄第三號ヲ
見合ス可シ

賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告人ノ證印ヲキ
時ハ原告人ノ證據ト爲スヲ得ス

第十條 手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル時ニ
至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買
付タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物
品ヲ受取可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載
シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附錄第四號ヲ
見合ス可シ

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ル可キ時
ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金
ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡ス可キ約定期限ノ
年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス
可シ附錄第五號ヲ
見合ス可シ

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取返サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ
職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ
奉公人又ハ弟子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ模倣密賣スル者ヲ差留メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書ス可シ

諸商工專賣ノ免許ヲクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨アルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乗合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴ルヲ得可シ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付キ各種ノ本條ニ照ス可シ

先ニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヲアルヲ以テ之ヲ訴ルヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヲ得サルノ法ト相抵觸スルコトナカル可シ第十三條ヲ見合ス可シ

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場へ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離姻ヲ爲ス可キ理由ヲ書ス可シ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母祖父母在ラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ附録第六號ヲ見合ヌ可シ

原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴フ可シ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ラ訴フ事ヲ得可シ

第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ理由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又

ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ
本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照ス可シ若シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルコトヲ得ヘシ

養子女ヨリ養父母ヲ相手取りテ自ラ離別ヲ請ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被雙方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條理ト被告人相續ス可キ條理ヲキコトヲ書ス可シ附録第六號ヲ見合ヌ可シ

第十八條 田島山林等賣買違約ノ訴狀

田島山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ

田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取ントスルノ訴狀モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ

第十九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ
舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱記ス可シ
繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ
附錄第七號ヲ見合ス可シ

但第七條但シ書ヲ見ル可シ

第二十條 控告ノ訴狀

原告人預審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟庭ニ臨ミ
又ハ裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト裁決ニ服セザルノ旨趣トテ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別

十年第十九號布告控訴上
告手續第五條第十五條參
省本類ニ載ス

冊ト爲シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト控告ヲ爲ス裁判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得ルヲ外裁決ノ言渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ爲スヲ得ス
預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ曲庇壓制等アルヲ以テ原告人ノ上等ノ裁判所ニ申告スル者モ亦本條ニ照ス可シ

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第二十一條 原告人共人員多少ニ拘ラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ同時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ル事

第二十二條 貸借ニ事以上ニシテ原告人共別人ニ非レハ一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得可シ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條 債主連名ノ證文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ以テ訴フ可シ若シ債主連名二人ナルチ一人ニシテ訴フル時ハ他ノ二人ヨリ依頼ノ證書ヲ以テ訴フ可シ附錄第八號ヲ見合ヌ可シ

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ訴ルモ乙ノ管轄ニ訴ルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條 負債主連名ノ借用證文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人數ヲ盡ク相手取ル可シ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戸長

某ヨリ承ルト附載スヘシ附錄第九號ヲ見合ヌ可シ

第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願フモ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任ヌ可シ

九年第九十九號布告金穀借用證書他人へ譲渡手續參看本類ニ載ス

第九章 讓證文ヲ以テ訴ル事

第二十八條 甲ヨリ乙ニ貸シ又ハ預ケタル米金ヲ甲ヨリ丙ニ讓リタルニ乙ヨリ丙ニ返済セスシテ丙ヨリ乙ヲ相手取り其米金ヲ受取ントスル訴狀モ住所氏名ノ次ニ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文ヲ寫載シ若シ甲ヨリ丙ニ讓リタル證文無レハ甲ト乙ノ關係ニシテ乙ト丙トノ關係ナシトス故ニ丙ヨリ乙ヲ相手取ルヲ得ス附錄第十號ヲ見合ヌ可シ

第二十九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ノ相續ヲ爲シタル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附證文ヲ所持スト雖モ父母祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ訴ルヲ得ス

第十章 (九年第十八號布告ヲ以テ代理人ノ條ヲ廢止ス)

第三十條

第三十一條

第三十二條

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ第四十七條及四十八條ヲ見合ス可シ

第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解ス可キ確證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アル可シ附錄第十三號ヲ見合ス可シ

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユ可シ若シ本人自署スルヲ能ハザル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

十七年三月司法省甲第
號告示ヲ以テ訴訟用紙ハ
美濃又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ
定式又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ
定式又ハ同尺ノ紙ヲ用ヒ

第五 答書ハ十六行ニシテ二行十五字詰ニ認メ正副ニ通テ具ス可シ

第二章 (七年第七十五號布告ヲ以テ代書人用ヒ方改定)

第二十四條

第三章 (九年第十八號布告ヲ以テ代書人ノ條ヲ廢止ス)

第二十五條

第二十六條

第二十七條

第四章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還付セサルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ證文返證文ハ原ノ證書ヲ還付セズシテ其米金ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ受取ノ證書ヲ交付スルヲ云フ爲シタル旨ヲ書ス可シ

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸付ノ米

金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ證跡ナキ時
ハ其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看做スヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟スベキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ
熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ビ其證書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其
約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札對談一札トハ返濟
延期ノ證書ヲ云フアルヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタ
ルヲ書ス可シ

第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主
本證文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主ナル者己レヨリ約ヲ破
リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證トナスヲ得ス

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ證ス
ル爲ニ管轄村ノ役場ニ届ケ置タル年月日ヲ人別帳ノ寫ヲ記載シ次

ニ此人別帳ノ印下證書ノ印下相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九
條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接
續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟ス可キ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴
ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期
限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタル
ヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ
其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ
書ス可シ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スベキ
期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ

更ニ丙某ニ貸附ク其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタ
ル乙某ノ事件ト未ダ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟
ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センコトヲ答ルヲ許サス何トナレ
ハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙
ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルコト能ハサル者ハ速ニ原告人
ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ奥書連印ヲ
爲サシム可シ附錄第十四號

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償入
既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ
各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立
テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延
期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返
濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ
書シテ原告人承諾ノ奥書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十五號

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ
解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告
人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ
答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ爲
サシム可シ附錄第十六號

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲
シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人
ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カ

ス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者
ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ奥書連印ヲ
爲サシム可シ附録第十七號
見合ヌ可シ

(訴答文例附録雛形
略ス)

○訴答文例ハ御國人ノミ遵守 明治六年十月
第三百三十九號布告

本年七月第貳百四十七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ有之當分
御國人ノミ遵守候儀ト可相心得此旨布告候事

○訴答文例中代書人用ヒ方 明治七年七月
第七十五號布告

明治六年七月第貳百四十七號布告訴答文例中原告人被告人訴狀
答書ヲ作ルニ必ス代書人ヲ用フヘキ旨記載候處自今左ノ通改定
候條此旨布告候事

一原告人被告人訴狀答書及ヒ雙方往復文書ヲ作ルニ代書人ヲ撰
ミ代書セシムル共又公代書人ヲ用ヒスシテ自書スル共總テ本

人ノ情願ニ任スルキ事

一原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ
以テ差添人トナシ訴狀答書等へ連印セシムヘキ事

但訴答文例中本文ト相抵觸スル廉々ハ總テ廢止ノ儀ト可相
心得事

○訴訟手續ニ差支サル者ハ差添人ニ及ハス 明治八年二月
第十三號布告

明治七年七月第七十五號布告訴答文例中改定原告人被告人ニテ代
書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ以テ差添人トナシ訴狀
答書等へ連印セシムヘキ旨記載候處自今原告人被告人訴訟手續
ニ差支サル者ハ差添人ニ不及候條此旨布告候事

○詞訟勸解ニ付代人受任 明治十七年一月
第一號布達

明治十三年五月司法省甲第貳號布達左ノ通改正ス
詞訟又ハ勸解ニ付已ニ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ
相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時